
世界を穿つ想像の力

J・P・フリーマン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界を穿つ想像の力

【Nコード】

N1366X

【作者名】

J・P・フリーマン

【あらすじ】

新湊海斗しんみづうかいとはごく普通の二十歳、大学生であった。漫画を描いたり、ネットサーフィンをしたり、妹と喧嘩するのが彼の日常だった。あの日、妹と一緒に夜の街を歩くまでは……
謎の男たちの襲撃、人知を超えた能力、さらわれた妹。そして、琥珀色の瞳の少女と出会ったとき、海斗の運命は大きく動き出す。
想像力を駆使して戦え！ 想像バトルファンタジー、ここに開幕！

消える漫画家

十九時十四分、新漚海斗しんみよつかいとは、自分の部屋にあるパソコンからメールボックスを開いた。

そこには待ちに待った、あるいは、できればもう少し後に来てほしかったメールが来ていた。差出人は明来社めいらいしゃ編集部となっている。相反する感情が入り混じるなか、海斗は高鳴る鼓動に身を震わせながら、そのメールをクリックした。

拝啓 時下益々ご清祥の御事とお慶び申し上げます。

さて、この度は第十二回「ニコニコ漫画新人賞」にご応募いただきました。本年度は去る二月十五日の締切までに二百十六編の応募があり、一時選考の結果、誠に残念ながららご応募作は、二次選考に進むことはできませんでした。悪しからずご了承ください。

尚、以下の四十八編が一時選考を……

海斗はそこでメールを読むのをやめた。

「アアアアアッ!」

そこからの絶叫。

「アアアアアッ、ワアアッ!」

部屋の中を飛び跳ねベッドにそのままダイブ。枕に顔をうずめてまたヒステリックな叫び声を上げたかと思えば、片手に枕を握り締めベットから飛び起きる。そして、枕を壁に向かって思い切り投げつけた。

枕はぼすつという低い音をたてて床に落ちた。海斗はその枕を見つめてもう一度絶叫した。

「ウワアアアーツ！ アーツ！」

そのとき、部屋のドアがばたん、といきよいよく開いて、こけしが海斗に向かつて飛んできた。こけしは海斗の頭に当たり、ごっつ、という鈍い音をたてた。

「うわあ！」

海斗は、さつきとは違う意味の叫びをあげた。そして頭を抑えてその場にうずくまった。

「さつきからうるさいのよ！」

部屋の入り口には茶髪セミロングの女の子が立っていた。海斗の妹の凜りんだった。

「静かにしてろ！」

凜はそういい残すと、開けたときと同じくらいの勢いでドアを閉めた。

「うつつ……」

心の痛みと頭の痛みで、海斗の目に涙がたまった。

新漚海斗は二十歳。大学に行っているが、彼には夢があった。漫画家になるという夢が。このことを話すと、「大学に入って漫画家目指すなんて……」と彼の周りの友人たちは笑う。

しかし、海斗は本気だった。漫画家という職業に憧れを抱いたのは大学一年の後期のことだった。

きっかけは大学のサークルであった。海斗は高校時代には美術部に所属していたので、絵はうまかった。そして大学に入学したときにそのスキルを役立てられるサークルとして、コミック・イラスト研究会に入会した。最初は絵が描けるという、それだけの気持ちで入会した。だが、ほかの部員たちを交流しているうちに、だんだんと漫画を描く面白さに目覚めていった。そしてついに自分の将来に漫画家という道を見つけ出したのだった。

夢を夢で終わらせないために、彼は日々漫画を描き続けていた。海斗は幼少のことから今に至るまで、空想世界を自ら想像して、そこに浸っていることが多かった。だから面白い話ならいくらでも描ける気がした。「画力のほうはそこそこあると自分では思っていた。

そして、八ヶ月ほどの歳月を経て描き上げたのが、「疾風戦士ウインダリアン」だった。

話の大まかな流れとしては、高校生の主人公、羽鳥翼はとりつばさが風の国からの使者、シルフィーとひょんなことからばったりと出会い、疾風戦士ウインダリアンに変身する力を得る。そして、ウインダリアンの力を使って、風の国と敵対する勢力に立ち向かっていく。

一見すると、ごくごく使い古された話のようで新人賞としての価値はないと思うかもしれない。

しかし、海斗は主人公の性格に特徴を持たせて、既存の作品との差別化を図ろうとした。主人公、羽鳥翼をとにかく人間くさく描いたのだ。ヒーローは正義感が強く、自らを犠牲にしてまであくどく戦い、それでいて見返りを求めない。これが世間一般のヒーロー像だろう。

海斗は羽鳥をヒーローとして描かなかった。学校に遅刻しそうになるだけでウインダリアンに変身して高速移動したり、強そうな敵が出てきたらすぐに逃げる。さらに、敵に勝利した見返りをシルフィーに求めるなど、羽鳥はヒーローではなく、一人間として徹底的に描かれた。いままでのヒーローとはあまりにもかけ離れたためなヒーローを描くことで読者の笑いを誘う狙いが、海斗にはあった。

この作品を自信满满で第十二回「ニコニコ漫画新人賞」に応募したのだが……結果はさっきの通りだ。現実はいつも厳しい。

海斗はゆっくりと立ち上がり、ベッドに寝転がった。無気力が体中にあふれて何もする気が起きなかった。ただぼんやりと天井を見つめているうちに、時間だけが過ぎていった。

一階から妹の声が聞こえてきた。

「兄さん、ごはんできたよ！」

海斗は気力をかき集めて立ち上がり、下へと降りていった。

今日の晩御飯はカレーだった。食卓には海斗と凧の二人だけが座った。

父は建築会社で働いており、今はベトナムで橋を造っている。しばらくの間は帰ってこない。

母は、もういなかった。十一年前、交通事故で帰らぬ人となっていた。

海斗と凧の仲は良くもないし、特別悪くもなかった。一緒にいても、お互いの領域には必要以上に干渉しない。これが二人の関係だった。

気持ちが沈んでいた海斗はお通夜のような夕食を終えると、さつさと二階に引っ込んでいった。

やる気もなにも起きないので、海斗はネットサーフィンでもしようかとブラウザを立ち上げて、ヤッホージャポンのホームページを開いた。

そのときであった。海斗はヤッホーニュースのある記事に目を惹かれた。記事の見出しは次のようになっていた。

『**網崎さん失踪**、消える漫画家たち』

海斗はその記事にアクセスした。

今月九日から漫画家の**網崎蓮治**さんの行方がわからなくなってることが警察の調べで明らかになった。この失踪事件を警察は、先月から行方がわからなくなった、同じく漫画家の**小町弥生**さん、**おおみや**るちるさん、**なかはら**宗次浪さんの失踪と関連付けて捜査を行うと発表。

網崎さんは明来社刊行の雑誌『週刊レインボー』で人気漫画『超鋼騎士ブレイダー』を連載していることで有名。関係者の話によると網崎さんに最近変わった様子はなく、行方をくまらず理由がわからないとのこと。

立て続けに起きた漫画家失踪の謎は深まるばかりである。

海斗は一ヶ月前から相次ぐ漫画家の失踪事件を知っていた。今回また新たな失踪者が出たわけだ。このセンセーショナルな事件に、海斗は特別な感情は抱かなかつた。不特定多数の人間と同じように、「ミステリーだ」とか、「不可解だ」という感想しか出てこなかつた。

海斗はこの記事を閉じた。それから、ヤッホー検索エンジンに『おっぱいパラダイス』と入力してエンターキーを押した。

このときの海斗は、まだ平和という名の草原で寝そべる羊だった。現在八時二十分。

この三時間後に、海斗の日常は崩壊した。

兄妹

二十一時四十二分。

東京某所の高層ビルの屋上で、二人の男が街を見下ろしていた。片方は背が高く軽薄そうな笑みを浮かべていて、もう片方の男は金髪で、顔に張り付いたような無表情をしていた。

二人は獲物を探していた。

「なあヴァーダ」背の高い男がいった。「この近くに同類はいないようだぜ？」

ヴァーダと呼ばれた金髪の男はうなずいた。

「わかっている。飛び抜けた『力』を感じない」
「場所を移すか？」

「いや、いい。もう少しここにいるぞ。おれたちは働きすぎだ。この一週間で『あっち側』と『こっち側』を三往復もしているんだ。そして、新たな同胞をまた一人迎えることはできた」

背の高い男の口元が緩んだ。

「正確に言つと、無理やり連れて行つた、だろ？」

「好きなように言えばいい。だが、この一ヶ月、われわれは十分な成果を出した。そうは思わないか？」ヴァーダは横目で背の高い男を見た。

「さあ？ それはお偉いさんが決めることだ」

「その通りだ」不意に後ろから声がした。

二人は瞬時に体制を反転させて臨戦態勢を整えた。

「そう構えるな」男は笑いながらいった。

煙のように音もなく現れたのは、黒いローブをまとった三十代の男だった。

「ウィルソン副隊長でしたか」ヴァーダは緊張を解いた。「驚かせないでください。何者かと思いましたがよ」

「驚かそうというつもりはなかったのだがな」その言葉には暗に油

断しきっていた二人を戒めるような響きが含まれていた。

「どうかしたのですか？」

「われらの同胞の確保のことで連絡がある。あと一人連れてくるんだ。それで当面の捜索は終わりだ」

「へえ、そりゃあついでる。この前は、あと四人は連れてくるようにと言われてたのに」瀬の高い男ははしゃいだ。

「何か理由でもあるのですか？」ヴァーダはウィルソンに訊ねた。

「能力開発が、思ったよりも手間取ることがわかった。これからさらにぞろぞろと、連れてこられても全員の面倒は見れないそうだ」
「そうですか」

「あともう一つ伝えなければならぬことがある。『希望の船団』のルナ・ハプソンが『こちら側』に来ている」

この報告に二人の男は驚いた。

「『こちら』に来れるのは、われわれだけのはずですよ」

「それは違う。『こちら側』に来るために道を作り出せるのは、ソフィア様だけではない。『イマジナリー・フォース』が使えるものなら、誰にだって可能性はある」

二人の男は黙って話を聞いた。

「とにかく気をつけることだな。伝言は以上だ。あとは自分たちで考えて行動しろ」

そういうとウィルソンは闇に溶けるように消えてしまった。

「『希望の船団』の連中がくるとはなあ」背の高い男は面白くなさそうにいった。

「敵の狙いは明らかにわれわれだ。『嗅覚』を使って、われわれを追いかけているのだ。鉢合わせすると戦闘は避けられんな」

「どうする？ 『存在を隠す結界』でもつくるか？」

ヴァーダは首をふった。

「ルナ・ハプソンの『イマジナリー・フォース』はわれわれよりも優れているに決まっている。そんなものは意味ない。無駄な想像はするな。残りの一人を早く見つけて、帰還するほうがいい」

「わかったよ。じゃあ行くか」

二人の男は助走もつけずにその場で跳んだ。二人の体は転落防止用のフェンスをはるかに越えて夜空に舞った。

二十三時二分。

海斗は夕食前に受けた痛手を抱えたまま、応募原稿のコピーを取り出してそれを見ていた。なぜ自分の作品が落ちたのか、海斗にはわからなかった。

キャラクターデザインがまずかったのだろうか。

ウインダリアンは鷹をモチーフにした戦士だ。グリーンヒーロースーツに、茶色の羽毛が、背中と肩、さらに頭、それから、手首から肘の間、そして、くるぶしから膝の間に生えている。腰からは孔雀の羽のような長く幻想的な色合いの羽が、腰^{こし}の^{みの}ように生え、尾てい骨からの延長上に鳥の尾のようなしっぽが生えている。顔はスピード感を感じされるシャープな造詣^{ぞうけい}になっており、後頭部には左右に鋭くそこそこ長い突起があり、上から見るとV字の形になっている。

海斗はためいきをついた。全体的に見ても、すらりとしたフォルムで悪くはないと思うのだが……客観的にどう見られているのだろうか？

海斗がももんもんとしているときに、トントンとドアをノックする音が聞こえた。

「なんだ？」海斗は散らばった原稿を集めながらいった。

部屋のドアが開き、凜がひよっこりと顔を覗かせた。

「ひよつと時間ある？」

「ああ？ まあ、あるけど」

「忘れてただけだ。今日、『最強執事サーバス』の発売日だった

のよ。これから買いに行きたいから、ついてきてくれない？」
『最強執事サーバス』とは、だめだめのご主人様トールマンと、その従僕サーバスが繰り広げるドタバタギャグ漫画だ。トールマンの驚愕のためだめ加減と、サーバスの、もはや人外レベルの万能ぶりがシリアスな笑いを生み出している。それが若年層を中心に大うけして、今年度の『このマンガがすごい』のベストテンに入るほどの人気が出ているのだ。

わたしはうんざりした口調でいった。

「書店はもう閉まつてる時間だ」

「コンビニでも売ってるの」

「一人で行けよ」

凜は腕を組んで、海斗を見た。

「このご時勢に、か弱き乙女に夜道を一人で歩かせるつもり？」

海斗はため息をついた。伊達に一つ屋根の下で、十何年も一緒に暮らしているわけではない。彼はこれ以上断つても無駄だと悟った。海斗が頑固に断り続けても、妹はより面倒なわがままを口からマシンガンのごとく吐き出し、彼を困らせ続けるだろう。

「わかったよ。着替えるから外で待つてる」

凜はにっこりとして、部屋から出て行った。

海斗と凜は並んで夜道を歩いた。

空には月がなく、街灯の光だけがぼんやりと道を照らしていた。季節は四月の終わりだが、夜はまだ、ひんやりとして涼しい。そのため、海斗は暗緑色のジャケットを、凜は黒のカーディガンをそれぞれ身につけていた。

二人はしばらく黙って歩いていたが、気まずさを感じた海斗が話題を提供した。

「お前、来年高校三年だけど、進路とかはもう決めてるのか？」

「二年になったばかりなのに、もう来年の話をするなんて、気が早いのね」

「進路はちゃんと考えておいたほうがいいぞ」

「兄さんが言っても説得力ないよ。せっかく、そこそこいい大学に行ってるのに、漫画家になるとか言い出すし」

海斗は胸を張った。

「漫画の楽しさに目覚める前のおれの人生は、無味乾燥も同然だった。ただ言われたことだけをこなす人生……その人生を生きていた俺はただノルマをこなすだけだった。たくさん勉強していい大学に入る。大学でもよい成績を修め、いい会社に入ってたくさん給料をもらう。そして、結婚して家庭を持って、幸せに暮らす。

そうという生き方が普通の生き方だと、小学校から暗に教えられてきた気がするな。でも、おれはそういう生き方に特別な魅力を感じたことはなかった。先生の言うとおりにして、勉強したよ。それでも新たな知識が得られても、それがうれしいことだとは思わなかったよ。実に退屈なことだと、いつも密かに思っていたよ。思い返せば、そんなおれが勉強に打ち込んだ理由は、周りの連中よりテストでいい点をとって、優越感に浸るためだけだったかもしれない。学生が勉学に打ち込むことは、それが学生の正しい姿なんだろうが、正しいことイコール好きなことという方程式は成り立たない。はつきり言おう、おれは勉強を優越感に浸るための道具としか見ていなかった。おれには合わなかったんだ。普通の生き方なんて」

「『普通の生き方が合わない』とか、じじくさい台詞だなあ」

海斗は凜を無視して続けた。

「だけど、漫画を描き始めて、おれの退屈な人生は一変したんだ。漫画を書いて、初めて何かに打ち込む楽しさを知った。日ごとに、もつとうまく描きたいという欲求が湧いてきた。これは他人に自分の力を誇示するための欲求ではなく、心の奥底から生まれた純粹な願望だった。それからだよ。おれが漫画家になろうと決めたのは」

「ふーん……そうだったんだ」

「どうだ、感銘を受けたか？」

凜はその質問には答えずに、「こういった。

「兄さん、現実には厳しいよ」

二人の会話はそれで終わった。

日常が壊れた夜

海斗と凜は道を右に曲がって商店街に入ってしまった。当然だが、どの店もシャッターが下ろされている。通りには人っ子ひとりどころか、猫一匹いない。完全な静寂がそこにあつた。

この六十メートルほど続いている商店街を抜けて、道を左に曲がって、横断歩道を渡った先が最寄のコンビニだった。二人は黙って商店街の真ん中を進み始めた。

商店街の半ばに差し掛かったときであろうか。海斗は、胸の中に不安がこみ上げてくるのを感じた。

海斗は後ろを振り向いた。しかし、そこには誰もいなかった。

「どうしたの？」海斗の様子に気づいた凜が訊ねた。

「いや、なんでもない気のせいだった」

嘘だ。気のせいではない。海斗の胸騒ぎは強まる一方だった。

「気のせいなんだ」

この言葉は凜に向けたというよりも、自分にそう言い聞かせるために発したものだ。 「大丈夫だ、行こう」

海斗がそういった直後であった。

二人の目の十メートル先に、一つの黒いが空から降ってきたのだ。二人はその様子を見て啞然とするしかなかった。それは人影だった。商店街のどこからの屋根から飛び降りたのだろう。しかし、人間がそんなことをして、きれいに着地できるわけがない。そんな自殺まがいの行為をしておいて、目の前の人間は何事もなかったかのように、まっすぐ立っているのだ。ありえないことだ。

その人物は二人のほうに歩いてきた。

海斗は全身が震え、汗がどつと吹き出るのを感じた。なんだから

わからんが、やばい。

凜はそんな海斗の腕をぎゅっと握った。彼女もまた、恐怖にとらわれていた。

街灯がその人物の姿を照らした。金髪のアールバックで、白いスーツを着ていた。彼の顔には人間らしい表情はなかった。まるで口ポットにゴムマスクをくつつけたような雰囲気だ。

その男はやばいオーラを発していた。

「大きな『力』を感じて来てみれば、まさか二人もいるとは」男はいった。

海斗は恐怖に突き動かされた。金髪の男との距離が、まだ十分開いているうちに、凜の手首を掴んで叫んだ。

「走れ！ 逃げるぞ！」

二人は回れ右をしたが、脚を前に出すことはなかった。

背後にも一人、さっきまでいなかった人間がいた。

そいつは、背が高く、黒髪短髪、だぶだぶの服に身を包んでいた。そのにやけた顔から、金髪の男の仲間であることは明瞭だった。

海斗の頭は真っ白になった。得体の知れない連中に囲まれて、窮地に陥っているのは明らかだった。

背の高い男がにやにやしながらいった。

「なあ、ヴァーダ。たしか、あと一人でいって言われてたよなあ？ 二人いるが、どうするよ？」

「かまわん。二人とも連れて行くぞ。帰還した後で、一人しかいらなと言われたら、どちらか殺せば済むことだ」

「はっはっは……ちげえねえ」

海斗はほとんど錯乱して叫んだ。

「いつたいなんだよ！ あんたらは！ いつたい何者なんだよ！」
背の高い男はおどけた。

「だーれなんでしょうねえ？」

海斗は必死に頭を回転させた。このままではまずいことは明白だ

った。連れて行くだの、殺すだの、こいつらはまともじゃない。それだけは確かだ。

このままでは二人とも危ない……凜。なんとか凜だけでも逃がさなければ！

「凜」海斗は小声で言った。「おれが隙をつくるから、その間に全力で走って近くの家に助けを求めろんだ」

「でも……」凜は不安そうな瞳を兄に向けた。

「心配するな。三分は持たせてみせる。おれを信じろって」海斗は強がった。妹を少しでも安心させるために、力のない笑顔を見せた。「いち、にの、さん、で思いつき走りだせ。あいつの横を抜けて行くんだ。わかったな」

凜は、震えながらうなずいた。

「よし、じゃあいくぞ」海斗は腹をくくった。

「いち」心臓が狂ったリズムを刻む。

「にの」無事に帰るために……

「さん！」二人は全力で走り出した！

海斗は背の高い男めがけて、凜はその男の横を通り抜けるために、必死に走った。

だが、その努力は報われなかった。凜は海斗の左前を走っていたのだが、白い影が風のように彼女に近づき、その身体をがちりと掴んだ。そして、ヴァーダは靴底で豪快に地面をこすって、相棒の隣で止まった。

「まずは、ひとり確保、だ」

一瞬のことであった。しかし、海斗は見たヴァーダは走っていない。地面の上をすべるように跳んでいたのだ。彼の腕に抱えられた凜は、おそらく気絶しているのだろう、手足を投げ出して、微動だにしなかった。

海斗の中で何かが壊れた。

「う、うわああああああ！」

半狂乱になって、二人の男に突進した。もはや海斗には正常な判断をするだけの知性は残っていないかった。ただ、目の前の妹を助けるために、身体を動かした。

「離せ！ 凜を、凜を……離せよおおお！」

海斗はヴァーダに殴りかかった。怒りのあまり大降りになる。しかし、ヴァーダは、凜を抱えたままで、海斗に対して身構えもしなかつた。それどころか、避けるそぶりすら見せなかつた。

だから、海斗の拳はヴァーダの顔を打ち抜くはずだつた。

その、はずだつた……

低く鈍い音が辺りに響いた。骨が砕ける音だつた。そう、海斗の拳が砕けたのだ。

そこには信じられない光景が広がっていた。

壁 コンマ一秒前には存在しなかつた金属性の壁が、海斗の拳を防いでいた。

海斗の驚愕は一瞬しか続かなかつた。その後、今まで感じたことのない激痛が脳にまで伝わってきた。

「ぐあああああああ！」

海斗は右手を押さえてその場に倒れこんだ。

激痛と混乱、さらに常識的理解を超越した現象に、彼の意識は破裂寸前にまで追い込まれた。これはまさに悪夢以外のなにものでもない。

「あ、ああああ……」悪夢には続きがあつた。

海斗は再び驚愕の光景を目にすることになった。

海斗とヴァーダを隔てていた壁は、さらさらと塵のように消えていった。

ヴァーダが再びその姿を現した。

「ふん、やはり素質があつても、『力』が使えなければ一般人と変

わらんな」

海斗の心は完全に折れた、いや、粉々に砕けた。

「助けて！ だれか！ 助けてください！」海斗は大声で助けを呼んだ。

そんな彼を見て、背の高い男は大笑いした。

「あはつはつは！ むだむだ、お前の声は、だれにも届いてないよ」そんなはずはないと思いつつも、海斗は男の言葉を真に受けている自分に気づいた。

「おまえたちは、いったい、何者なんだ？」海斗はぼろぼろと涙をこぼした。

ヴァーダの口元が醜く歪んだ。

「お前らが知る必要はない」

背の高い男が海斗に向かって、ぬつと手を伸ばした。

もうだめだ……海斗はすべてをあきらめた。自分はたった一人の妹すら守れずに、正体不明の男たちに連れ去られるのだ。そのあと自分たちがどうなるはわからない。それが怖くて仕方なかった。

しかし、海斗の体がつままれることはなかった。

二人の男は、後ろへ跳んだ。

次の瞬間、大剣が飛んできて、辺りを震わせる衝撃とともに地面に突き刺さった。海斗は呆然と、男たちは険しい顔でその大剣を見た。

「見つかったか……」ヴァーダは歯をむき出しにしてうなづいた。

海斗には、何もかもスローモーションに映った。彼女は二人の男たちがそうであったように、上から飛び込んできた。彼女はライトブラウンに染まった長い髪をなびかせ、海斗に背を向けて、二人の男たちの前に立ちふさがった。

白いロングコートを纏った彼女の後姿は、海斗に不思議な安心感を与えた。海斗のなかにあった恐怖が薄らいだ。

彼女は首を回して、片目だけで海斗を見た。彼女の瞳は鋭くも美しい琥珀色であった。

「大丈夫？」必要最小限の確認であった。

海斗は言葉が出ず、一度うなずいただけだった。

「そう」彼女は首を戻して、二人の男をしっかりと見据えた。「じ

ゃあ、あの子も助けてあげないとね」

彼女の体から闘気があふれ出た。空気がぴんと張りつめ、ここは一瞬で戦場の様相となった。

イマジナリー・フォース

海斗の皮膚には自然と鳥肌がたった。

恐怖はもうなかった。大剣を握り、二人の男と向かい合っている謎の女性に、痺れた。

街灯に照らされた彼女の姿を見て、ヴァーダは険しい顔になった。

「この展開はなんとしても避けたかったのだがな……」

「ヴァーダ、どうするよ？」男から先ほどのふざけた調子が消えていた。

「オリアス、お前はこの娘を『あちら側』につれて帰れ。一人つれて帰ればノルマ達成だ。おれよりお前のほうが速いだろ」

オリアスと呼ばれた男は、ヴァーダから凜を受け取った。そして、ヴァーダは一步前に進み出た。

「おれは時間を稼ぐ、行け！」

「ああ、わかったよ。やばくなったらさっさと逃げるよ」

そういつてオリアスは空高く跳び上がった。

「凜！ 凜！」海斗は叫んだ。

オリアスの背中はあるという間に遠ざかっていく、同時に凜の姿もどんどん小さくなっていった。たった一人の妹に、もう二度と会えない。そんな絶望的な考えが海斗の脳裏をよぎった。

「ちい！」謎の女性はオリアスを追おうとしたが、目の前に突如として巨大な壁が現れ、彼女の行く手をさえぎった。

「邪魔だ！」

彼女は大剣を一振りして、壁を斜めに切り裂いた。壁は包丁で豆腐を切るかのように、やすやすと二つになった。壁は先ほど同じように塵となって消えた。

「おれの壁がこうもやすやすと壊されるとは……やはり『イマジナ

リー・フォース』は、そちらが上か」

「お前ではわたしを倒せない」彼女はヴァーダをにらみつけた。

ヴァーダは余裕を崩さなかった。

「倒すつもりはない。ただ足止めをして、適当なタイミングで逃げればわれわれの勝ちなのだからな」

「できると思うか？」そういうと彼女の持っていた大剣は、さっきの壁と同じようにさらさらと消えていった。「一気に勝負をつけさせてもらう」

彼女はあることに意識を集中させた。

驚いたことに、彼女が念じると、彼女の目の前にいくつもの光の玉が自然発生した。

集中し……自分のなかのイメージを……創造する！

「『ユニーク・イマジネーション』 聖騎士（ホーリーナイト）」

光の玉は一つにまとまって、その形を変化させた。そのシルエットは人のように見えた。

光が収まると、そこには白銀の鎧に身を包んだ戦士が現れていた。フルフェイスの兜で顔は見えなかったが、さっきまでいなかった人物が光の中から現れたのは間違いなかった。

海斗の思考はもはや置いてきぼりになっていた。今はただ、目の前で起こっていることを呆然と眺めるしかなかった。

「いけ！」彼女の号令とともに、聖騎士は地面をすべるような動きで、ヴァーダとの距離をつめた。

ヴァーダは近くに入ってこられる前に高く跳びあがり、青果店の屋根の上に着地した。いつのまにかその手には金属製の棒が握られていた。彼はその棒を両手で構え、聖騎士に向けた。

「はあ！」

気合の入ったかけ声とともに、棒はものすごい勢いで伸びる。その先は聖騎士に向かって突撃した。

聖騎士は難なくこの攻撃をかわして、ヴァーダに向かってジャンプした。

ヴァーダは向かってくる聖騎士を空中で叩き落そうとして、棒を横に振るった。しかし、聖騎士はわき腹と左腕で棒を挟み、棒を伝って滑り降りる形でヴァーダに近づいていった。

ヴァーダは手にしていた棒を塵にして、後ろに下がった。

聖騎士は剣を振り下ろしながら、屋根の上に着地した。剣はヴァーダのわずか手前で空を斬った。

ヴァーダは空振りの隙をわざと見逃し、屋根から地面へと飛び降りて、聖騎士からまた距離をとった。ヴァーダに戦う気がないのは明らかだった。

海斗はかなり焦っていたこうしている間にも、凜はどんどん遠くに行ってしまう。

謎の女性も同じことを思っていたらしく、真正面からあたってこないヴァーダに対して舌打ちをした。

「接近戦に持ち込めないなら、遠くから狙い撃ちにするまで！」

聖騎士が敵に向けて左手をかざす。手のひらに光が集まり、野球ボール程度の大きさに膨らんだ。その光の玉がヴァーダに向けて放たれた。

ヴァーダは身をよじって、間一髪でそれをかわした。しかし、聖騎士は同じように、二発目、三発目を打ち込む。

ヴァーダは自身の目の前に壁を出現させたが、光の玉が数発当たっただけで、それは崩壊してしまった。

「ちい！ ならこれでどうだ」

そう言うと、ヴァーダの周りに、かなりの濃度の霧が発生した。ヴァーダの姿は完全に消えた。

「無駄だ」

彼女は聖騎士を霧の前に突っ込ませた。地面に着地すると同時に、聖騎士は剣を思い切り振りぬいた。剣圧のみで霧は吹き飛んだ。

霧は消え去り、目を大きく見開いたヴァーダが姿を現した。

聖騎士はヴァーダに対して、全身で当たっていった。そのタックルは見事ヴァーダに決まり、ヴァーダは後ろ向きに吹き飛んだ。

「ぐはあ！」

背中を地面に打ちつけたヴァーダはうめいた。

聖騎士は倒れているヴァーダに剣を振りかざして飛びかった。

海斗はこれで決まったと思った。ヴァーダは仰向けに倒れて起き上がれない。聖騎士の剣は確実にヴァーダに振り下ろさせると思った。

しかし、ヴァーダはにやりと口元をゆがめた。

「『ユニーク・イマジネーション』 アンダーグラウンド」

次の瞬間、ヴァーダの体が地面に吸い込まれていった。彼の姿は完全に消えた。

聖騎士が振り下ろした剣は、固い音をたてて地面に突き刺さった。ただそれだけだった。

「くそ、逃げられたか？」

謎の女性は悔しがった。彼女は唇をかんで凜が連れ去られたほうを見たが、手遅れだと悟ったのか、すぐにうつむいた。

聖騎士は再び光に包まれて、この場から消えた。

彼女はへたり込んでいる海斗の目の前まできて、謝った。

「すまない。あの子を助けられなかった」

海斗は混乱した頭で今ある疑問を次々と、彼女にぶつけた。

「凜は、凜はいつたどこに連れて行かれたんだ？ それに、あんなやあの男たちは何者なんだよ。急に何もないところに壁ができてたり、武器が出てきたり、戦士が現れたり、しかも、跡形もなく消えるなんて、いったいどうなってるんだよ？」海斗の声は震えていた。

「あの子は凜というのか」

「ああ、おれの、おれの妹なんだ、あいつはいつたい、どこに連れて行かれたんだよ？」

「落ち着いて聞いてほしい。これからわたしの言うことは、とても信じられないかもしれない。しかし、全部本当のことなんだ。だから、君にはこの事実を受け止めてほしい」ここで彼女は間をおいた。「君の妹は、わたしたちの世界に連れ去られた。こことは違う次元に存在する別の世界に、だ」

海斗は放心状態に陥った。

「別の、世界？」

「ああ、信じられないかもしれないが、わたしとさっきの連中は次元の壁を越えてこの世界にやってきた」

海斗はすんなりと彼女の言葉が受け入れられた。不思議なことではなかった。さきほどまでさんざん起こりえない現象を何度も見せつけられたのだ。いまさら異世界が出てきても驚きはしない。

「いや、信じるよ。さっきまでさんざんわけのわからないことが起きてたんだ。今は異世界だって何だって信じられるよ」

「そうか」彼女はうなずいた。

海斗は不安を抑えながら、一番気がかりなことを訊ねた。

「それで、凜は、向こうの世界に連れて行かれて、どうされるんだ？」

「簡潔に言えば、兵士にされる」

「へ、兵士だって！」海斗は叫んだ。「凜が兵士になるものか、あいつはまだ十七なんだぞ」

彼女は悲しげに首をふった。

「男であろうと、女であろうと、若くても、年老いていても関係ない。君も見ただろう。さっきに戦いを」

海斗ははっとした。

「凜も、あんなことを、させられるのか？」

「ああ、あいつらは君の妹以外にも、こちらの人間を何人が連れ去っている。わたしはそれを阻止するために送り込まれたんだ」彼女は悲しげな表情になった。「失敗してしまったがな」

海斗はそれを否定した。

「いや、あんたが来てくれなければ、おれも凜と一緒に連れて行かれてたよ。少なくとも、あんたは一人救ったわけだ」

「そういつてもらえろと、ありがたいな。だが、連れ去られた人たちは必ず助け出さなくてはならない」

「連れ去られる人間は何を基準にして選ばれるんだ？」海斗は訊ねた。

「素質だよ。さっきわたしたちが使った力を、使える可能性があるかどうかだ」

「さっきの力……あれはいつたい何だよ？ 急にものが出てきたり、消えたりして、わけがわからない」

「『イメージナリー・フォース』だ」

「イメージナリー……フォース？」

「簡単に言えば、頭の中で想像したものを具現化する能力だ。そして、その具現化された想像は、現実世界に作用する」

「そ、そんなことができるのか？」海斗は驚いて両手をあげたが、右手に鋭い痛みが走って、うめいた。海斗の右手は真っ赤に腫れあがっていた。

「イメージナリー・フォースが使える人間は一般的に『イメージネータ』と呼ばれる。壁も、剣も、聖騎士も、霧も、最後にあいつが地面に消えたのも、イメージナリー・フォースの力だ。それと目で見るとわかりにくいかもしれないが、あの連中の冗談みたいな身体能力もイメージナリー・フォースを使った結果だ。『強靱な肉体』を想像すれば、あのような、超人的な飛躍も可能だ」

彼女は両手で海斗の右手をやさしく包んだ。

「そして、イメージナリー・フォースはこんなことにも使える」

彼女が強く念じると、彼女の両手から暖かな光があふれ出し、海

斗の右手に集まった。光はしばらくして消えた。彼女は立ち上がった。微笑んだ。

海斗は自分の右手を見て驚いた。さっきまで右手を支配していた腫れと痛みはきれいになくなっていった。海斗の右手はもとどおりに治っていた。

「す、すごい」海斗は息をのんだ。これはまさに神の奇跡に匹敵することだ。「いったい何をやったんだ？」

「わたしは『傷を癒す光』をイメージした。そして、イマジナリー・フォースを使いそれを具現化したんだ」

「すごい力だな。何でもできる。あんたたちの世界にいる人はみんなこういうことができるのか？」

「わたしたちの世界にいる全員が使えるわけではない。イマジネーターは世界人口の約二十%ほどだ。力が使えても、具現化できるものは、その人が持つイマジナリー・フォースの強さに依存する。その人のイマジナリー・フォースがとても弱々しいものだったら、小さくて、身近にあるものぐらいしか具現化できない。強力なイマジナリー・フォースを持っていれば、剣や壁、あと、さっきやった『傷を癒す光』のような抽象的なものも具現化できるようになるんだ」

「おれや凜には、あんたの言う強力なイマジナリー・フォースがあった。だから狙われたというのか？」

「そういうことだ」彼女はうなずいた。

「でも、おれも凜も、そんな力一度も使えたことはないぞ」

「イマジナリー・フォースを使いこなすためには、訓練が必要なんだよ。ほかのことにあてはまるけど、才能あっても勝手にスキルが上達するなんてこと、ありはしないんだ。才能と努力、この両方を併せ持つものだけが真の一流になれる」

「なるほどな」海斗は疑問を腑に落とした。

ここで彼女は、唐突に、海斗に背中を向けた。

「さて、傷も癒えたことだし、君はもう帰るといい。今日こゝであ

ったことは誰にも話さないほうがいい。ここから先は、わたしの仕事だ。君の妹はわたしが必ずつれて帰る」

彼女の言葉に、海斗は急に閉め出された気がした。彼女の申し出は、海斗にとつて到底納得のいくものではなかった。

「いやだ。おれも連れて行ってくれ」

彼女は驚いて、海斗を見た。

「正気でいつてるのか？」

「ああ、そうだ」海斗の表情には固い決意が表れていた。

「危険すぎる」

「おれにも、おれにもイマジナリー・フォースがあるんだろ。だったら、訓練次第で戦えるようになるんだろ？ あいつは、凜はたった一人の妹なんだ！ ここで帰るわけにはいかねえ！ 見捨てるわけにはいかねえ！ あいつはおれの助けを待っている。おれは人任せにするんじゃないくて、自分の手であいつを助けたいんだ！ 頼む、この通りだ！」

海斗は土下座した。異世界人相手に土下座が通じるかどうかはわからなかった。だが、心は、想いは通じるはずだ。

どれくらいの時間がたっただろうか？ 海斗にはそれが十秒にも思えたし、一分にも思えた。海斗はじつと動かなかった。

彼女はため息をついた。

「わかった。顔を上げろ、連れて行ってやる」

この言葉を耳にした海斗は、歓喜の表情で彼女を見た。

「ただし訓練は厳しいぞ。敵と戦うことになったら自分の身は自分で守れ。わかったな」

「ああ、どんな訓練にだって耐えてみせる」

海斗は立ち上がった。

彼女は海斗に向けて、手を差し出した。

「ルナ・ハプソンだ」

「え？」海斗は、相手が何を言っているのかわからなかった。

「名前だよ。これから一緒に行動をするんだろ。お互いの名前くらい知っとくべきだろ」

それを聞いて、海斗も穏やかな表情で名乗った。

「おれは新漣^{しんみょう}海斗^{かいと}だ」

そういって、海斗はルナの手をぎこちなく握った。

ゼボネア理想国

そこは、港街のとある倉庫の中だった。そこには木箱が規則正しく積み重ねられており、本来ならば、だだっ広い空間に壁と通路を作り出していた。倉庫の中は電気がついておらず、闇と静寂がそこを支配していた。

ただ、その男の周りには不気味な青白い光の玉が漂っていた。

オリアスは倉庫の奥で、木箱の山に囲まれて時間を待っていた。あと五分でゲートが開く。

オリアスは脇に抱えている娘を見た。まぶたが閉じられたその顔には、まだ成熟しきっていない幼さを残していた。今まで連れ去ってきた連中の中でも一番若いだろう。それでも、彼女からは強大な『イマジナリー・フォース』を感じる事ができた。まったく、いい拾い物をした。

誰かが木箱に触れる音が聞こえた。オリアスは音のしたほうに、光の玉を向けた。

光の先に、髪の毛を乱したヴァーダがいた。

「よう、無事だったか。どうだった？」

ヴァーダはオリアスの隣に並んだ。

「正直言って、危なかった。『アンダーグラウンド』を使うのがもう少し遅れていたらお陀仏になっていたな」

「さすがは『希望の船団』の高級戦力、『三想主』さんそつしゅの一人、ということか」

「しかし、やつらのなかに、次元超越ができるやつがいたとは。まあ、今となってはどうでもいい話だがな」そう言って、ヴァーダは凜を見た。

二人はそれっきり黙った。

数分が経過したとき、二人の目の前に緑に輝く渦ができた。渦は空中でゆつくりとまわり、だんだんと大きさを増していった。渦はとうとう牛一頭がゆうゆうと通れるサイズにまで成長した。

二人は迷いも、ためらいもなく、その渦の中に足を踏み入れた。まばゆいばかりの光が二人の体を包む。しかし、それはほんの一瞬の出来事だった。視界はすぐに良好になり、二人がよく知っている部屋がそこにはあった。

石造りの床と壁、頭上でゆらゆらと揺れる裸電球、オーク材の机、部屋の隅にある本棚、そして見知った顔が二人を出迎えた。

「無事帰還したようだな」黒いローブを纏ったウィルソンがいった。彼の隣には椅子に座り、ひざの上で両手を組み、瞑想をしている女性がいた。彼女は二十代前半で、凜を除けば、この部屋にいる人のなかでは一番若かった。肌は透き通るように美しく、髪はつややかに電球の光を反射していた。

彼女が立ち上がると同時にゲートは消失した。

「オリアス、ヴァーダ、ご苦労様です」

二人はゲートを創造していたこの若き女性、ソフィア・ストルムに今日の成果を報告した。その際に、ルナ・ハブソンが介入してきたことも伝えた。

「わたしの知覚に間違いはありませんでしたか。半日前、時空のはざまを超える存在を感じました。その者の『イマジナリー・フォー』の性質から、わたしはその人物をハブソンだと推測しました。『希望の船団』から時空超越者が出てきたのは問題でした。もう少し早い段階で、こちらの動きに介入されたら、計画に大きな支障が出ていたでしょう」

ウィルソンはうなずいた。

「ええ、しかし、われわれの方が一足早かったようです。目的の人物はこれでそろいました。あとは彼らをわが軍の戦力として使えるようにするだけです」

そのとき、オリアスに抱えられた凜がうめき声を上げた。彼女は意識を取り戻して、ぼんやりと辺りを見回した。見知らぬ部屋、見知らぬ人物たち、さっきの男たちの顔を見た。そして、ようやく自分の置かれている状況を理解したとき、凜は声を上げることすらできず、ただ震えるばかりであった。

「それで、これからどうするんだ？」海斗はルナに訊いた。

ルナは意外なことを言い出した。

「とびきり甘いものを調達してきてくれ、あと体を落ち着ける場所がほしい」

海斗はこの答えに戸惑った。戦ったばかりなので、休憩するのはわかる。しかし、こんなときに彼女が甘いものをほしがるとは予想もしなかったことだ。

「あ、甘いものがほしいのか」

「そうだ。普通の甘い食べ物じゃないぞ。甘い、甘い、あまあいものだ」

海斗はルナを連れて、本来の目的地となるはずだったコンビニに行った。

ルナはコンビニを見て、驚いた。

「なんと、夜中に営業している店があるのか？」

「コンビニだからな」と海斗は言ったが、あまり答えになってないような気がした。

「夜は明日に備え、休憩するための時間だぞ。その時間までもわざわざ金儲けに使うとは……ここのオーナーは間違いに違いない」

海斗はルナが下品な言葉を使うのに驚いた。

「あんたがどんなところから来たかは知らないが、こっちはあ、これが普通だ。夜中に営業している店なんて腐るほどあるぞ」

ルナは理解しがたいという顔をした。

二人は店内に入り、お菓子棚の中にある品物を吟味した。

「ごじんまりとしているくせに、品揃えはいいな」とルナ。

「コンビニだからな」海斗は同じ答えを繰り返した。

「この店で一番甘いものはなんだ」

海斗は板チョコレートに手を伸ばした。

「いくつほしい？」

「できれば、たくさん。手持ちのストウーラがもう無くなったからストウーラってなんだよと思いつながら、海斗はチョコレートを五枚手に取った。そしてレジに向かおうとしたが、ふとした考えが、彼の足を止めた。海斗は漫画コーナーに行き、『最強執事サーバス』の最新刊を手に取った。

それから清算を済ませた。

二人は近くの公園まで行き、ベンチに並んで腰を下ろした。

夜の公園というものは、同じ場所であっても昼間とはまるで違う世界に見える。子供たちが遊んでいない遊具は、闇のなかでひっそりとたたずむ奇妙なオブジェにすぎない。

ルナはチョコレートの包装を乱雑に破り捨て、中身とむしゃむしゃと食べた。

「これはうまい！」彼女は感動の声を上げた。

あつという間に一枚まるまるの板チョコを食べ終わると、彼女はすぐに二枚目に手を伸ばした。

「おい、あんた。一度にそんなに食べると糖尿病になるぞ」

彼女は、海斗の心配などお構いなしの様子だった。

「トニーヨー病がどんな病気かはよくわからんが、心配するな。わたしにとって、いや、イマジナリー・フォースを使うものにとっては、この程度の糖分補給は当たり前のことなんだ。イマジナリー・フォースを使用している間は、膨大な集中力を必要とする。それが結果として、脳を酷使しているんだ。脳が疲れてくると、それが具現化した想像の弱体化につながる。それはわれわれにとって命取り

になることなんだ。だから、イメージナリー・フォースを使った後は、こうして糖分を補給して脳にエネルギーを与えてやる必要がある」なるほど、と海斗は思った。要するに将棋の対局と同じようなものか。プロの棋士同士の対決は、常に脳をフル回転させて、何十手先の手を常に考えていると聞いたことがある。棋士たちも同じく、体内ですばやくエネルギー変換される糖分を、対局中に補充することで、最初から最後までその集中力を保っているのだ。

海斗はチョコレートをほおばっているルナに対して、質問したいことがあった。

「なあ、ルナさん」

「呼び捨てでかまわん」

「えっ？」海斗はたじろいだ。

彼はこれまで同年代の女性を下の名前　この場合はファーストネームだが　で呼び捨てで呼んだことがなかった。抵抗があったし、何より恥ずかしい気がした。

彼は緊張しながら、彼女の名前を言った。

「ル、ルナに、訊きたいことがあるんだ」

「なんだ？」

「凜を連れ去った二人組みは、何者なんだ？」

ルナはチョコレートを飲み込んだ。

「あいつらは、ゼポネア理想国の人間だ」

「ゼポネア理想国？　なんだそいつらは？」

ルナは難しい顔をした。

「ふむ、わたしと一緒に来るからには、わたしたちの世界のことを知ってもらう必要があるな」

ルナは残りのチョコレートを銀紙に包んでポケットにしまった。

「少々長い話になるぞ」

「ああ、かまわない」

海斗がそう言うと、ルナはゼポネア理想国のこと、そして、その

国が抱える病魔のことを語りだした。

歴史、そして、旅立ち

「奴らのことを理解してもらうために、最初から話そう。すべての始まりは七十二年前になる」

七十二年、海斗にはそれが大昔のように思えた。

「その当時は、ゼポネア想国なんて国は、わたしたちの世界にはなかった。それに開拓されていた土地も今よりずっと少なかった。当時の人々は、世界にある大陸は、二つだけ、西のルボン大陸と東のラーマ大陸だけだと思っていた。」

だが、その認識は、今から七十二年前に覆されたことになった。航海術の発達によって、より安全な長距離の航海が可能になった。ある男の航海が、新大陸の発見につながったんだ」

「その男の名前、まさかコロンブスと言うんじゃないのか？」

「ちがう。いきなり何を言い出すんだ」

ルナは話の腰を折られてご立腹だった。

「いや、似たような話を学校で習ったんで……」

「続けるぞ。新大陸を発見した男の名前がゼポネアだ。彼もまたイマジナリー・フォースを持った人間だった。ゼポネアは、二チ力国という、ルボン大陸の最西端の国から、世界の果てを見に行くために、西に向かって航海をした。世界の果てを見に行くなんて、馬鹿みたいな話だと思うが、当時のゼポネアは本気でそう考えていたらしい。彼は百人以上の船員とともに約二ヶ月の航海を行った。そしてたどり着いたのが、未開の大陸だった。のちにこの大陸は発見者のゼポネアの名前から、ゼポ大陸と名づけられた。」

ゼポネアが上陸した土地周辺を探索すると、その大陸には先住民が住んでいて、そこその文明を築いていたことがわかった。ルボンやラーマ大陸と比べると、その文明レベルは五十年ほど遅れてい

たらしいがな。だが、もつとも重要なことはゼポ大陸の人間はイマジンナリー・フォースを使える人間がいなかったということだ。イマジンナリー・フォースを持つゼポネアとその仲間たちは、先住民たちにその力を披露すると、神のように崇められた。この経験がゼポネアの人生に決定的な影響を与えることになったんだ。

ゼポネアと彼の部下たちは一ヶ月ほど、このその大陸に滞在したらしい。その間、ゼポネアたちは神の国からの使者のように扱われた。彼ら、特にイマジナリー・フォースが使えた連中は有頂天になった。そんな扱いは彼らをだんだんと高慢な性格へと変えていったんだ。

一カ月後、ゼポネアたちは現地で物資や、その土地独特の鉱石や植物を調達してから故郷への帰路に着いた。そして、無事に二チカ国に帰還した。ここまででは、この話はゼポネアのただの冒険譚に過ぎない。歴史が大きく動いたのはこの後だ。

ゼポネアは二チカ国の国王に自分が発見した大陸のことを国王に報告したんだ。最初は疑念を抱いていた国王も、彼の持ち帰った、見たこともない鉱石や植物を見ると、彼の話を信じるようになった。そしてゼポネアは新大陸に大艦隊を派遣することを進言したんだ。当時の二チカ国は周りを強国に囲まれていたため、隣国の支配下に置かれる危険が付きまわっていた。ゼポネアは新大陸を植民地にして、二チカ国の領土拡大を提案。さらに新大陸にある未知の天然資源を確保することで、隣国との貿易を優位に進めることを、国王に伝えたんだ。

そして、半年後にゼポネアの提案した艦隊が組まれた。大小あわせて十二隻の戦艦、五隻の輸送船が二チカ国の港を出発した。そのときの艦隊の総司令官は、二チカ海軍のホーントン将軍だった。ゼポネアは艦隊の副司令官に任命された。二カ月後、一団は新大陸に

到達した。ゼポネアとその部下たちにとっては二度目の新大陸だった。そこでは、ゼポネアたちの案内も役に立たなかった。というのも、到着した場所が、彼らが最初に来た土地とは違う土地だったからだ。だが、それはあまり関係なかったようだがな。彼らは先住民と接触して、このゼポ大陸の情報を手に入れた。当時のゼポ大陸には十二の国があり、それぞれの国で多くの小競り合いが起きていた。彼らがそのときたどり着いたところはランバンという国だった。ホーンテンとゼポネアはイマジナリー・フォースを使って、先住民たちをひれ伏させた。やはり先住民たちは、彼らを神のように恐れた。彼らはラホバン王に会い、脅迫まがいの交渉を持ちかけた。ゼポネアたちの要求は、ランバン軍の指揮権を自分たちに譲位するように命令した。ランバン王はそれに従った。

こうしてゼポネアたちのゼポ大陸の侵略が始まった。彼らは隣国にランバン軍を派遣した。といっても、実際に戦ったのはイマジナリー・フォースを持った連中だ。イマジナリー・フォースは強力だ。並みの兵器なんかよりもずっと。イマジネーター一人で八百人の兵を撃退したという記録も残っているほどだ。結果は当然、ゼポネアたちの連戦連勝だった。

その結果、ランバンはわずか数ヶ月にその領土を四倍に増やした。ゼポ大陸に存在していた国も、十二から七にまで減少した。ゼポネアたちの侵攻はそこでひと段落した。ゼポネアたちはランバン王を退位させた。ランバン王の後釜はホーンテン將軍が勤めることになった。これでランバンという国は消滅し、二チカ国の新領土となった。元ランバン国は二チカ国からの移民の受け入れ口となった。ホーンテンは現地のインフラを整えたり、本国とのやり取り、民衆のコントロールを行った。二チカ国はだんだんと力をつけていった。

しかし、それも長くは続かなかった。二チカ国にとっては予想外の出来事が二つ起きた。一つは、他国も二チカ国がやったようにゼ

ポ大陸に植民地を作り始めたことだ。ゼポ大陸の残りの領域は、ソルバド公国と、ラクセン帝国が二分してしまった。これでゼポ大陸は南東にニチカ国、北にソルバド公国、南西にラクセン帝国、というように三つの国が混在する形になってしまったんだ。ニチカ国にとっては、ほかの二国はニチカ国発展の邪魔以外なんでもなかった。そして、ニチカ国にとってよくない二つ目の出来事が起こった。それは、ホーンテン将軍が風土病にかかって行政を満足に行えなくなったことだ。ホーンテンの代役に挙げたのがゼポネアだった。彼は艦隊の副司令官だったからこれは妥当な人事だった。ホーンテンは、ゼポネアがニチカ国の植民地管理のトップになってから三週間後に亡くなったよ。

さて、ホールテンのあとを継いだゼポネアだったが、この頃の彼はだいぶ性格がゆがんでいたらしい。彼は、一度目の航海で体験した手厚い待遇で彼は高慢になった。そして、彼は大陸侵攻で、イマジナリー・フォースを使って先住民たちと戦った。結果はもちろんゼポネアの圧勝だ。彼は一人で数多くの敵を打ち倒した。はむかってくるものは徹底的に殲滅した。彼は戦い続けるうちに、イマジナリー・フォースを持つ自分を、特別な存在だと、神に選ばれた存在だと錯覚するようになった。そのときの侵攻は、ゼポネアの高慢さをさらに高め、不自然な方向へと歪めた。そして、ゼポネアが植民地管理のトップになったとき、彼はイマジナリー・フォースを持つ者しか人間と認めない、能力差別主義者になっていた。

ニチカ国にとって、これは致命的な人選ミスとなった。ニチカ王はイマジナリー・フォースを使えなかったのだ。そのときのゼポネアにとっては、イマジナリー・フォースを使えない凡人に仕えることなど、耐えられないことだった。ゼポネアは反乱の計画を立てた。イマジネーターたちだけを自分の周りにおいた。そして、彼らに大陸中から優秀なイマジネーターたちを集めさせた。つまり、ソルバド領

とラクセン領からも人材を雇ったのだ。戦力は着々と整いつつあった。そして、ゼポネアが植民地管理のトップに就いてから五カ月後、ゼポネアは二チカ国に対して独立を宣言した。ゼポネアの裏切りに二チカ王は激怒した。そして、ゼポネア肅清のために、本国から軍隊を送り込んだ。ゼポネアと二チカ国間の戦争はゼポネアの圧勝だった。ゼポネアのほうが、はるかに準備が整っていたし、本国の軍は長い船旅のあとでの戦争となったので、戦争が始まったときには、すでに疲弊した状態だった。これを最後に二チカ国はゼポネアに干渉してくることはなかった。この敗北で二チカ国は立ち直れないほどの打撃を受けた。その二年後に、二チカ国は国土を分割されて、隣国に吸収されることになった。

改めて独立を宣言したゼポネアは、二チカ植民地領をゼポネア理想国と改名した。長くなつたが、これがゼポネア理想国の誕生だ。それから彼はイマジネータ優待政策をとった。彼の政策は単純明快、イマジネータには多くのものが与えられる。それ以外の人間は多くのものが課せられる。政治家になれるのはイマジネータのみだ。そのため、ゼポネア理想国は、イマジネータによるイマジネータのためのイマジネータの国となった。イマジネータたちは生活環境が整備された首都に住み、それ以外の人間は僻地へと追いやられることになった。ゼポネアはイマジネータ以外の人間にノーマロイドという呼び名をつけた。今ではゼポネア理想国ではその呼び名が定着している。

ゼポネアはもう二十年前に死んだけど、彼の思想は、彼の後継者たちに受け継がれている。ゼポネア理想国は建国されて以来、イマジネータ優位の社会を崩さなかつた」

海斗は信じられない思いで彼女の話聞いた。違う世界にも一部の人間が自分本位の優劣を定め、多くの人間を支配している国があるなんて。こ自分自身に絶対的な価値があると信じて、それを定規

にするのが人間の本质とでもいうのか？

「ノーマロイドたちは、国外に逃げ出さなかったのか？」海斗は自分の震えていることに驚いた。

「それができたのは、ニチカから来た裕福な人間だけだった。あとのものはどこにも行くことはできなかった。重い税金が、貧困を生み、貧困が人々をその地に縛り付けた。ノーマロイドたちは外国に行く金すら蓄えられない。それが現実だ」

海斗はルナの言葉が胸にしみこむのを待って、質問を変えた。

「あんた、さつき、凜が連れて行かれたのは、兵士として使うからだって言ったよな」海斗はもそもそと言った。

「ああ、そうだ」

「なんでゼポネアは兵士を欲しがるんだ？ 戦争でも始める気か？」ルナの顔は険しくなった。

「その通りだ。ゼポネア理想国は、同じゼポ大陸のソルバド公国に攻め入ろうとしている」彼女の顔からもことの重大さが伝わってきた。

「な、なんでだよ？ どうして戦争なんかするんだ？」

「ソルバド公国もラクセン帝国も、ゼポネア理想国と同じように、ゼポ大陸の侵略を行った。しかし、その二国がゼポネアと違ったのは、イマジネータとノーマロイドの差別政策を行わなかったことだから、その先住民たちにも、イマジネータと同様の権利と義務が与えられた。その二国はゼポネア理想国の政策をよく思っていないかった。特にソルバド公国は、その政策を非人道的として非難し続けた歴史がある。」

そして、六年前だ。ソルバド公国は、ゼポネア理想国のノーマロイドを自国に受け入れる政策を考え始めた。まあ、これには純粹な救済というよりも、自国に住ませたノーマロイドたちを、新たな労働力として使うという打算的な考えもいくらか含まれている。これに対してゼポネア理想国の首脳陣は激怒したんだ」

「なんでさ？」

「ゼポネア理想国のイメージネーターたちの生活は、ノーマロイドたちからの税金で保たれている。その収入元がなくなるのは、ゼポネア理想国の崩壊につながることなんだよ。ゼポネア理想国はソルバド公国に対して、深刻な内政干渉だと抗議した。だが、いくら外からわんわん騒ごうと、ソルバドの政策を取り消すことはできない」

「だから、武力に訴えることにしたのか」海斗は鬱々とした気分になった。

「そうだ。ゼポネア理想国は今、強力なイメージネーターを集めている。独立戦争のときと同じようにな」ルナはそう言ってベンチから立ち上がった。「ゼポネア理想国の高慢をこれ以上許すわけにはいかない。だからわたしは戦うんだ」決意に満ちた声だった。

「あんたは、ソルバド公国の人間なのか？」

「わたしのことは向こうに着いてから詳しく話す。疲労も回復したし、そろそろ行くぞ」

「行くつて、どこにだ？」

「なに寝ぼけたことを言ってるんだ。『向こう側の世界』に行くんだよ」

「こつやって行くんだよ」

そういうと、ルナは海斗にぎゅっと抱きついてきた。

いきなりの出来事に、海斗はどぎまぎした。うわっ、おっぱいが当たって気持ちいい……じゃなくて、いたいなんだこれは？

「お、おい！ いきなり何するんだよ」

ルナは海斗に身体を密着させたまま言った。

「いいからじっとしてる。あと、口は閉じておけ、舌を噛み切るかもしれないぞ」

「へっ？」

海斗はぼかんとしたが、次の瞬間すべての思考は置き去りになった。

赤い光が二人の身体を包んだかと思うと、海斗とルナはものすごい初速度で、上へと飛び上がっていった。海斗はあっという間に絶した。

それでも、二人を包む赤い光は、高く、高く、暗い夜空へと向かっていった。

そして、光は闇の中に潜るようにして消えた。

海斗は、遠い、遠い世界へと、旅立った。たった一人の妹を救うために。

希望の船団

「おい、こら起きろ」ルナは仰向けに転がっている海斗に呼びかけた。

海斗は重苦しいうなり声をあげたが、目は未だに覚めなかった。

「起きろちゅーに」

ルナはその場にしゃがみこんで、彼のほおをぺちぺちと叩いた。

海斗は頬から伝わる微振動を感じ取ってうつすらと目を開けた。

彼の視界に、ルナの顔がぼんやりと映った。彼はあたりを見回しながらゆっくりと起き上がった。

「ここは？」

海斗とルナは森の中にいた。どうやら昼間らしい。二人の周りには道らしい道はなく、草木がうつそうと生い茂っていた。木々の枝葉が空からの光を遮っているため、あたりはほの暗かった。

「おれたち、さっきまで公園にいたよな。どうしてこんなところにいるんだ？」

海斗はおろおろと戸惑った。

ルナはため息をついた。「なんだ、覚えてないのか？ わたしたちは次元の壁を越えたんだ。今、ここはわたしが元からいた世界だ」「へえー……って！ ええええええっ！？ ここが異世界？」

海斗は自分の置かれた状況は目まぐるしく変化したことに順応できず、右往左往した。

「反応が遅い」ルナは海斗の鈍感ぶりにあきれ返った。「さっき、光に包まれて身体が浮いただろ？ あのとき、次元の壁を飛び越えたんだ。わかったか？」

海斗は公園での出来事を思い返した。

「あれもイマジナリー・フォースなのか？」

「ああ、そうだ」ルナはにやりとして海斗を見た。「ここが異世界

だという実感はあるか？」

海斗はゆっくりと首をふった。

「ふっ、まあ、今はそれでいい。とりあえずようこそ、とでも言うておこうか。ここがわれわれの住む世界、『バイネ』だ」

「はあ、そうなのか」海斗は相変わらさずぽかんとしたままだ。

ルナはくるりと背を向けていった。「いくぞ」

「いくぞ、ってどこに？」

「ここから歩いて街に行くんだ。その街にわたしたちの基地がある」

二人は歩き出したが、海斗にはまだ訊きたいことがあった。

「ここが異世界だということはわかった」海斗は落ち着いて言った。

「だけど、今、俺たちがいる場所はどこなんだ？」

「ゼポネア理想国の北部だな」

海斗は、ルナの答えにひっかかりを感じた。ゼポネア理想国……つまりここは。

「敵の領地じゃないか！」海斗は信じられない思いだった。

「そうだ。わたしたちがいるところは敵の懐だ」

「ソルバドってところに行かないのか？」

「ああ、そういう話は話してなかったな。わたしは確かにゼポネア理想国と敵対している。だけど、わたしはソルバドの人間ではないんだ。わたしはゼポネア生まれのゼポネア育ち、生粋のゼポネア人さ」

「じゃあ、つまりあんたは自分の国と戦っているのか？」

ルナは淡々と答えた。

「わたしは『希望の船団』という反政府組織に所属している。そこで、今の政府を打倒するための活動を行っている」

「そうだったのか」海斗は納得した。しかし、また別のもやもやとした霧が頭の中に立ち込め始めた。

よく考えてみれば、ルナはイマジネータだ。ゼポネア理想国にいるイマジネータは、優雅な生活を送れると、さっきルナが話してく

れたではないか。

「なあ、ルナ」

「ん？」ルナは振り返った。

「ルナはイマジネータなんだろ。楽な暮らしができるのに、それでもゼポネアと敵対するのか？」

海斗にとっては無邪気な質問のつもりだった。しかし、それを聞いたルナの顔にはどこか暗い影が落ちた。

海斗の質問を聞いても、ルナは黙って歩き続けたが、数十秒後に口を開いた。

「イマジネータの中にも、ゼポネアのやり方を不快に思っている連中がいるってことさ。わたしもそんな一人だ」

海斗はその答えに何か釈然としないものを感じ取った。だが、彼は何も言わずに、ルナのうしろを歩いた。

二十分後に、彼らは無事に森を抜けた。

森を抜けた先にあつた風景は、青い空と、緑の平原、そして小高い丘とその上に建てられた街だった。

「街が見える」海斗は言った。

「あれは『クオート』という都市だ。わたしたちは今からあの街に行くぞ。『希望の船団』の本部があそこにある」

クオートは石造りの壁に囲まれた都市で、その街並みは十九世紀のヨーロッパに似ていた。海斗はルナのあとについて街を回った。

石畳の道を歩き回っていると、ルナは二階建ての店の前で止まった。どうやらその店は旅館のようだ。

ルナはその旅館の中に入ってしまった。海斗も戸惑いながら彼女の後に続いた。ルナは受付カウンターにいる黒髪の女性に話しかけた。

「今空いている部屋はあるかな？」

受付の女性はにこやかに答えた。

「はい。ございますよ」

「一部屋借りよう。四泊ほどしたい」

「四泊でございますね。かしこまりました」

「あと、訊きたいことがある」

「はい。何でございますか？」

「ここら辺でおいしい魚料理を出す店は知らないか？」

「ここと同じとおりにスノーホワイトというレストランがござい
ます。その鱈は絶品だとよく耳にします」

「そうか。ありがとう」

「宿泊料ですが、お先にお支払いいただけますか？」

「ああ、いくらだ？」

「四百レコン（二万円）になります」

ルナはお釣りが出ないように、きっかり四百レコンを支払った。

カウンターの女性は鍵を取り出して、ルナに渡した。

「一階の八号室になります」

ルナは鍵を受け取って、廊下の奥に進んだ。海斗は彼女のあとについていったが、カウンターの女性が自分に不思議そうな視線を送っていることに気づいた。

「これからあなたたちの本部に行くんじゃないのか？　なんでわざわざ部屋を取るんだ？」海斗は戸惑いを隠さなかった。

ルナは海斗にしか聞き取れない声量で答えた。

「本部はここにある。さっきの女性もわたしたちの一味だ。あのやり取りは一種の合言葉みたいなものさ。まず最初に四泊止まることを受付係に伝える。次に魚料理のある店のことを訊ねる。最後にお釣りが出ないように宿代を支払う。すると彼女は八号室の鍵を渡す。八号室こそが『希望の船団』本部の入り口なんだ」

八号室のドアは廊下の突き当たりから一番近いところにあった。ルナは鍵を取り出してドアを開けた。部屋の中はいたって普通だった。

部屋のおくには簡素なベットが一つ、その隣には収納棚があり、部屋の真ん中には丸テーブルが一つ、二脚の椅子があった。向かい側の壁にはカーテンがかかった窓がり、その隣にはちいさな額に入れられた風景画が飾られていた。海斗が部屋に入るとルナはドアの鍵を閉めた。

「なあ、ここどこに本部とやらがあるんだ？」

ルナは質問に答えない代わりに、丸テーブルをその場からどかし、床を探り始めた。そして、かちつと音がしたかと思うと、丸テーブルの下敷きになっていた部分が持ち上がり、下に続くはしごが出てきた。

「すげーな」海斗は漫画やアニメでしか見ないような隠し通路に簡単とした。

「感想はいいから、早く降りて」

海斗は先にはしごを降り始めた。ルナははしごに手をかけた状態で、開いた床を元に戻した。二人の周りに闇が広がった。

「うわ、何も見えない」海斗は声を出した。

「足を踏み外さないように気をつけて」

海斗は闇の中をゆっくり降りていった。一分ほど降り続けたときに、下のほうにぼんやりとした光が見えてきた。

「もっ少しだ」ルナは静かに言った。

海斗の足はついに地面を踏んだ。海斗は振り返って今自分がいる場所をしっかりと見回した。ここは赤レンガで上下左右を固められた通路だった。通路の縦横大きさは二メートルを越えているだろう。意外と広い空間であった。光源は壁に取り付けられた、鈍い光を放つ電球のみであった。よく目を凝らすと、通路の置くに両開きの金属扉が見えた。

ルナが飛び降りて海斗の後ろに着地した。彼女は立ち上がって言った。

「ついて来い。あそこが本部の入り口だ」

ルナと海斗は奥まで進んだ。ルナは扉のドアノブを回した。扉は重苦しい音をたててゆっくりと開いた。

扉の向こう側の空間で、一番最初に海斗の目に付いたものが大きな木製テーブルだった。テーブルの前にはブラウスを着た燃えるような赤毛の女性が座っていた。

「今帰ったよ、シエリス」

シエリスと呼ばれた女性は、ぱっと顔を上げてルナを迎えた。

「ルナ」彼女は海斗を見てから言った。「そちらの方は？」

彼女の答えは簡潔だった。

「入団希望者だ。優秀なイマジネータの資質を持っている」

「へえ、そうなの！」シエリスは興味深げに海斗を見た。

「新湊海斗です」

海斗はぎこちなく挨拶をした。ぎこちなくなるのも当然だった。

彼女は日本では、滅多にお目見えできないような豊乳の持ち主なのだ。ブラウスのボタンがはちきりれそうになっている！海斗は視線を落とさないことに全神経を集中させた。

「あたしはシエリス・ラフクロスよ」

ルナはシエリスに質問をした。「なあ、シエリス。団長は今部屋にいるか？」

「うん。いるよ」

「そうか。ありがとう」ルナは海斗と向かい合った。「これから団長に今回の件を報告しに行く。お前も来い」

ルナはそういうと奥に続く通路を進み始めた。通路を進むと、突き当たりにドアが見えた。今度のドアは木製のごく一般的なドアだった。

ルナは軽く二度ノックをした。すぐに中から「入れ」という野太い声が聞こえてきた。

二人はドアを開けて中に入った。

熊のような大男が椅子に腰をかけ、机の前に座っていた。

「今帰ったよ」目上の人間に対してこの挨拶である。

「見ればわかる。……ところで、隣の若造はなんだ？ お前の新しい男か？」大男は海斗を見据えながら言った。

「ちげーし。今から説明するよ」

ルナは異世界であったことを順々に、丁寧に報告した。その間、大男は一言もしゃべらずにルナの話に耳を傾けていた。ルナの話が終わってから、大男は口を開いた。

「なるほど、お前さんは妹を助けるためにここまで来たというのか」大男はにやりとした。「おれはロング・カーター。『希望の船団』の団長をしている。つまり、ここのトップだ。さっそくだが、お前さんに言いたいことがある」

ロングは立ち上がった。彼の大きさに海斗はたじろいだ。

「な、なんですか？」

ロングの顔から笑みが消えた。

「ここはガキの遊び場じゃない。さっさとお家に帰りな」

海斗は凍りついた。ロングの残酷な言葉が頭の中でいつまでも反響していた。

修行開始

うちに帰れ。それがロングの宣告だった。

ロングはさらに続けた。

「おれたちは命を懸けて戦っているんだ。お前にはそれが理解できているのか？ 妹を助けたい。その気概は結構だ。だが、お前にそれができるのか？ ただ勢いだけで飛び出してきた青二才に、敵陣の中にとらわれている妹を助けることができるのか？」

ロングの一言、一言が海斗の心に重くのしかかっていた。海斗は「できる！」と思い切りいってやりたかった。しかし、彼にはできなかった。海斗は代りにこう言った。

「おれには、イマジナリー・フォースがある」

ロングはせせら笑った。

「なるほど、確かにイマジネータの素質はある。だが、今のお前さんにイマジナリー・フォースは使えない。そうだろ？ だったら今のお前はイマジネータではない。ただの一般人だ」

海斗は歯を食いしばった。

「ルナは、訓練すればイマジナリー・フォースが使えるようになると言っていた。だから……」

ロングがすぐに割って入った。

「だから、自分も訓練を積みめば、イマジナリー・フォースが使えると？ 強くなれると？ そう思っているのか？ やはりお前は何も知らない青二才だ」

「なんだと？」

「自分だけが特別だと思ふな、ということだよ。お前が目指している地点は、何万人という先人たちがとつくの昔に通り過ぎた場所だ。イマジナリー・フォースを身に着けたところで、お前より強い人間

は何千人といるんだよ」

ロングはじつと海斗を見据えた。海斗は微動だにしなかった。

「そこんところをちゃーんと理解してないと、お前、死ぬよ」

海斗は鉄パイプで頬を打たれたような気分になった。自分の死などまだ遠い先のことだと思っていた。

海斗は幼い頃に、自分が死んだらどうなるのだろうか、寝る前に考えることがあった。自分がいない世界を考えた。考えているうちに恐怖がじわじわと胸の中に広がっていった。まだそのときは、自分の死など具体的にイメージできなかった。代りに底知れぬ恐怖だけがやってきた。そんなとき、海斗は隣で寝ていた母の腕をぎゅっと掴むのだった。まだ、元気だった母の腕を……。

自分が死ぬのは嫌だった。だけど……。

「おれは死ぬのは嫌だ。でも、妹を失うのはもつと嫌だ！」

純粹な叫びだった。海斗は母を事故で亡くした。そのときのことを思い出すと、今も胸が張り裂けそうなほどの悲しみが押し寄せるのだ。急な形で家族を失うのはもう二度とごめん。

「おれは人の何倍も努力する。そして、ほかの奴らの何倍も強くなる！」

海斗はロングの目を見た。ロングは眉一つ動かさなかったが、海斗に向かって言った。

「そこまで言うなら、一つテストをしよう」

「テスト？」

「お前さんに一週間やる。その間にイマジナリー・フォー스의訓練をしろ。そして、ルナと戦え」

最後の一言を聞いて、ルナは怪訝そうな顔をした。ロングは気にせず続けた。

「そして、お前さんがルナに勝ったら、お前さんの覚悟を認めよう。その日からお前さんは『希望の船団』の一員だ。だが、ルナに負けただけの場合は元の世界に帰れ、というか、強制送還だ」

海斗は黙ってロングの提案を聞いた。静かな闘志が彼の中で燃えた。

「いいですよ。やってやりますよ」

ルナは悲しげな視線を海斗に送った。しかし、海斗は気がつかなかった。

「では、指導教官をつけてやろう」

ロングがそう言うと、どうやって呼ばれたかは知らないが、ドアが開いてシエリスが入ってきた。

「ボス、呼んだ？」

「ああ、こいつにイマジナリー・フォースの使い方を教えてやってくれ。一週間でルナに勝てるように鍛えさせろ」

「無理でしょ」シエリスはきっぱりと言った。

「無理は承知だ。とりあえずやれるところまでやってくれ」ロングもひどいことを言い出した。

海斗は二人のやり取りに不満を覚えながらも、シエリスに従って部屋の外までついに行った。団長の部屋には、ロングとルナだけが残った。

ロングはルナに向かって言った。

「珍しいな。お前が感傷的になるとは」

「何の話かな？」ルナはとぼけてみせた。

「あの坊主をここまで連れてきたことだよ。やはり重ねて見てしまっただけか？」

ルナはいらだたしげに手を振った。

「しつこく頼み込んできたから、仕方なく連れてきただけだよ。それだけだ」

「そうか」ロングは静かにつぶやいた。

海斗はシエリスに連れられて、旅館とは別の外に通じる道歩いた。二人は街から離れた場所に出た。そこは草木がまばらにしか生えていない、岩がごろごろ転がっている荒地であった。そこにはさびしげな雰囲気漂っていた。

「ここで訓練をします」シエリスはにこやかに言った。「とりあえず、一週間しか時間がないから、必要最低限のことしか教えないよ」海斗は黙ってうなずいた。

「ほらほら、あんまり硬くならないで」彼女はラベンダーの香りをふりまきながら言った。

「は、はい」

「それじゃあ、まず、基本中の基本。精神統一をします。はい、肩の力を抜いて、頭の中を空っぽにして」

海斗は、彼女がなぜそんな指示を出すのかが、1%も理解できなかったが、とりあえず言う通りにした。

五分が経過した。海斗はいつまでこんなことをするのだろうか不安になってきた。

「あの……」海斗はしびれを切らした。

「ほら、しゃべらない。余計なことを考えない」シエリスはぴしゃりと言葉を放った。「話しかけようとする気があるのなら、まだ余計なことを考えている証拠よ。イマジナリー・フォースを使うためには、クリアな意識が必要よ。まずは頭の中を無にするの。そして、何もなくなつた場所に自分のイメージを組み立てていくのよ」

「難しすぎますよ」海斗は嘆いた。

「ぼーっとすればいいだけよ」

二人の横から鋭い声が飛んできた。「お前は教え方が下手すぎる」

二人が顔を向けるとそこにはルナが立っていた。彼女の手には大きなろうそくと燭台が握られていた。

「ぼーっとしろなんて、言うのは簡単だが、実際やってみるのは難

しいものだ」ルナは二人に近づきながら言った。

「ルナ、手伝ってくれるの？」シエリスはいった。

「ああ、団長に言われたよ。時間があるなら手伝ってやれとな」

彼女は燭台を地面に置いて、ろうそくを立てた。それからシエリスに指示を出した。

「シエリス、火」

「ああ、はいはい」

シエリスは力をこめた視線をろうそくに向けた。次の瞬間、小さな火がちろちろとろうそくの上で踊った。

「すごい！」海斗は火のついたろうそくをまじまじと眺めた。「今のもイマジナリー・フォース？」

「ああ、そうだ。シエリスは火をイメージすることが得意なんだ」

「まあ、火の扱いに関しては、ここではわたしが一番ね」シエリスは得意げに言った。

「『希望の船団』にはイマジネーターは何人いるんだ？」

シエリスは朗らかに答えた。

「五人よ。今ここには、団長とわたしたちの三人しかいないけど、まあ君もそのうち全員と顔を合わせることになるわ」

「さて」ルナは海斗と向き合った。「海斗、座ってこのろうそくの火をじっと見るんだ。余計なことを考えずにただ見ているだけでいい」

海斗はあぐらをかいて地面に座った。

「ろうそくの火は不思議と人の心を落ち着かせる作用がある。この火を見続けることでイマジナリー・フォースを使うための精神が整うはずだ。何よりこの方法は簡単だし、一人でもできる」ルナは淡々と説明した。「今日一日は寝るまでろうそくとにらめっこをすることだな。それで頭の中をからっぽにする感覚をつかめ」

ルナはそれだけ言うと、二人の前から姿を消した。

「相変わらずクールね」シエリスはルナの後ろ姿を見ながらつぶやいた。

海斗はルナに言われたとおり、ただじつと火を見つめた。ろうそくの火は、微妙な変化ではあるが、静かに揺れたり、ときに大きく揺れたりした。時の流れとともに、ろうそくはどんどん短くなっていった。そして、海斗の頭の中は余計な考えが抜け落ち、クリアな状態になっていった。

三十分後、ろうそくの火は消えた。海斗は代わりのろうそくをもらおうと、顔を上げた。

むにゅり。海斗の後頭部にやわらかいものが当たる。海斗が振り向くと、そこにはシエリスが海斗の頭を覗き込むようにして、前かがみの状態で立っていた。さきほど海斗の頭が当たったのは、シエリスの豊乳だった。

「おわあ！」海斗は尻を地面につけたまま猛然と後退した。「す、すいません！」

一人であわあわする海斗を見て、シエリスはくすりと笑った。

「謝らなくてもいいのよ。それより今のはずいぶんと形になっていたわよ。わたしがずっと後ろに立っていたのに、まったく反応しなかったんだから」

「えっ、そ、そうですか？」

「その感じを忘れないでね」

海斗はそれから日が暮れるまで精神を落ち着ける訓練を行った。

日がとつぷり暮れた後は、『希望の船団』のメンバーと一緒に、本部の食堂で夕食を食べた。ロング団長はほかのメンバーの前で、海斗を紹介した。そこで、「彼はイマジネーターだが、使い物になるかどうかはまだわからない」と付け加えた。海斗はまだ正式な団員で

はないということだ。

『希望の船団』のメンバーたちは男も女もいたし、年齢もばらつきがあった。彼らは、この大陸にもといた先住民の子孫にあたるノーマロイドだった。彼らは皆貧乏だった。働いても、働いても、稼いだ金は税金に消えた。十分な蓄えがないために、彼らはどこにも行くことができなかった。

海斗はそんな人たちに囲まれて、パンとシチューにパクついた。ここではイマジネータもノーマロイドも関係なかった。皆が同じ席に座り、同じものを食べた。

夕食のあと、海斗は用意された空き部屋に入れられた。マットが引かれたベット、収納棚、机と椅子。最低限のものしかなかった。部屋の照明は薄汚れた電球だけで、十分な明るさを確保できてはいなかった。ここで本を読むと間違いなく目を悪くするだろう。

海斗は机に向かって、シエリスからもらってきたろうそくを置いた。それに火をつけて、昼間と同じようにろうそくと向き合った。

その日、海斗の部屋は夜遅くまでろうそくの火がついていた。

肉体強化

次の日、海斗は朝早くからシエリスとともにイマジナリー・フォーの修行に励んでいた。昨日と同じ場所で、しかし、今日はろうそくを使ってはいなかった。海斗はろうそくなしで精神統一を行う訓練をしていた。

「うん、ちよっと休憩しようか」シエリスは言った。「いい感じになってきたわね」

「そ、そうですね？」海斗は精神統一の構えを解いた。

「そろそろ次のステップに行ってもいいと思うよ」

「本当ですか！」海斗は飛び上がらんばかりに喜んだ。

「うん、期限もあと六日だし、少し急いだほうがいいだよ」

シエリスはそう言うと、何も無い空中から大きめのダンベルを二つ作り出した。二つのダンベルは鈍い音をたてて地面に落ちた。

「うお！」海斗は思わず後ずさりをした。

「心配いらないわよ。これもイマジナリー・フォースだから」シエリスはにこりと微笑んだ。「じゃあ海斗、そのダンベルを持ってみて」

「ああ、はい」

海斗は二つのダンベルを両方の手で握った。そして、渾身の力をこめて持ち上げようとした。

「ぶぐぐぐ……」海斗は奥歯をしっかりとかみ合わせたままになった。

このダンベル、意外と重い。海斗の精一杯の力で右手のほうは胸の高さまで、左手は腰の高さまでしか持ち上げられなかった。

「けっこう重いでしょ。それ二十キロあるから」

二十キロ……道理で重いわけだと海斗は密かに思った。

「もうおろしてもいいよ」シエリスは顔に赤みがさしている海斗を見て言った。

海斗はダンベルをおろすとせいぜい喘いだ。

「こ、これはどんな訓練なんですか？」

「イマジナリー・フォースの基本、肉体強化を行うのよ」

海斗は迷子の子犬のように困り果てた。

「肉体強化？ イマジナリー・フォースは想像を具現化する力なんでしょう。この重すぎるダンベルを持ち上げるのに、いったい何を想像すればいいんですか？」

シエリスは右手の人差し指を下唇に当て、視線をやや上向きにして、うーんとうなった。なかなかセクシーな絵になっている。

「まあ、そねえ。このあたりは想像というより『思い込み』みたいなものが大きいからねえ」

「思い込み？」海斗は首を傾げた。

「まあ、お手本を見せてあげるわよ。ついてきて」

シエリスはそう言うと、海斗に背を向けて、歩き出した。海斗もそれを追って歩き出した。一歩踏み出すと、自分の目の前にあったダンベルが消えていることに気づいた。

シエリスは、大きな岩の前で立ち止まった。高さはおよそ一メートル五十センチ。ずんぐりとした形をしており、厚みもかなりある。表面は突起が目立ちごつごつしている。広い底面が地面とぴたりとくっついているため、非常に安定感がある。まるで地面から突き出しているかのようだ。

シエリスはその岩と向かい合ったまま、海斗に話しかけた。

「今からお手本を見せるわ。わかりやすく解説をつけるね」

そう言って、シエリスは右手をぐつと握り、右足を一步引いた。

海斗はまさかと思った。

シエリスはぽつぽつと言葉を発した。実に静かで落ち着いた声だ

った。それは海斗に向けているというより、独り言のように聞こえた。

「わたしの右手は世界一硬い……硬い……。わたしの踏み込みは音より速い……速い……。わたしの身体は石柱のように重い……重い……」

シエリスはここですつと目を閉じた。

「とてつもなく、重く……硬く……速い……。だからわたしの拳は……すべてを破壊する！」

シエリスはかつと目を開き、全体重を拳に乗せるような形で、岩めがけて腕を振りぬいた。

海斗は戦慄した。シエリスの拳はすさまじい勢いで岩にぶつかった。普通なら、拳が碎けるだろう。しかし、今の彼女は普通ではなかった。岩を捉えた拳は、何事もなく、さらに奥へと突き進んだ。岩の上半分はバラバラに碎け、吹き飛んだ。大小さまざまな破片が、地面へと降り注ぐ。

岩の上半分がなくなった。それが結果だった。

シエリスは両手を腰に当てて、満足そうに半分になった岩を見た。「まっ、こんなものね」

海斗はやつとのことで感想をひねり出した。

「す、すげえ……」

「どう？　これがイマジナリー・フォースによる肉体強化。さっきの独り言みたいな開設は聞いてくれたでしょ。わたしは、最高に硬い拳と、音速を超える動き、そして、岩を越える質量が自分に備わっていると自分に言い聞かせたのよ。究極に簡単な説明をすると、強い自分を想像するのよ。それが肉体強化よ」

「難しそうだな……」

「なに言ってるの。これはイマジナリー・フォースの中でも簡単な部類に入るよ。まあ、習うより慣れる、ね。まずはやってみる事が肝心よ」

そう言うと、シエリスは再びダンベルを作り出した。
「自分はこれを持ち上げるだけの腕力がある、自分にそう言い聞かせるの」

シエリスのアドバイスを聞き、海斗は前かがみになって地面に転がるダンベルを握った。それから、ろうそくの訓練のときの、あの波紋一つない水面のような心を思い出した。海斗は、頭の中の余計な考えをすべて排除した。

海斗はじつとダンベルを見つめた。海斗は内なる自分に語りかけた。これは二十キロのダンベルだ。だが、おれはこれを軽々持ち上げられる。いや、二十キロどころか、三十キロ、四十キロ、もっと重いものを持ち上げることができる。おれにはできる、できるんだ。

海斗は、このことを何度も何度も自分に言い聞かせた。これを繰り返しているうちに、海斗に不思議な変化が現れてきた。海斗は自分の腕が自然と温まっていくのを感じた。それは海斗が今までに経験したことのない感覚であった。自然と両腕に力がみなぎるのを感じた。今ならやれる、海斗はそう思った。

「うおおおお！」

気合を込めて、海斗はダンベルを持ったまま腕を上げた。それから後のことは、海斗にとって驚くべきことだった。

二十キロのダンベルを持ち上げ、背筋を伸ばす、この力自慢にしか軽々とできないことを、海斗はいともたやすくやってのけた。ダンベルの重みはまったく感じられなかった。両手に握られているダンベルは発泡スチロールのように軽かった。

シエリスがぴしゃりと声を飛ばした。「気を抜かないで！ 集中したままにいるのよ！」

海斗はしっかりと意識を集中したまま、ダンベルを見ていた。信じられないほど軽い。いや、ダンベルが軽いのではない。自分の腕

力が強化されているのだ。

「あの……次はどうすればいいんですか？」海斗はシェリスに言った。

「とりあえず、一回地面に下ろしてみて」

「はい」海斗はダンベルを地面に降ろして、手を離れた。「できましたよ！」海斗は嬉々とした表情で、飛び上がりながらシェリスを見た。全身で喜びを表現している。海斗は確かにイマジナリー・フォースを使ったのだ。

「一回で成功させるなんて、すごいね」シェリスは素直に海斗をほめた。「海斗、センスいいよ。これなら一週間で、かなり成長するかも」

「えっ、ホントですか」海斗はにこにこした。

「まあ、努力次第だけだね」

海斗は初めてイマジナリー・フォースが使えたことで、がぜんやる気がみなぎってきた。

「よし、じゃあ、次のステップにいきましょう。岩でも、壁でも、砕いてやりますよ」

「まあ、そう焦らないで、イマジナリー・フォースを持続させる訓練をしましょう。」

イマジナリー・フォースは長く継続して使えば使うほど、脳にかかる負担は大きくなって、注意力が散漫になっていくの。これはイマジネータにとってはよくないことだわ。意識の乱れは、イマジナリー・フォースの強さに悪影響を与えるからね」

「悪影響？ たとえば、どんな？」

「一言で言えば、弱体化。集中力が衰えるほど、それに比例して、イマジナリー・フォースも弱くなるの。さつき岩を砕いて見せたけど、イマジナリー・フォースが弱まれば、あんなに強烈な一撃は出せないわ。せいぜい、岩の表面にひびを入れられる程度にまで落ちるわね。だから、同等のイマジネータ同士の戦いだと、さきに集中

力が切れたほうが負けといっても過言ではないわ。だから、イマジナリー・フォースを継続して使えることは非常に重要なことなの」

難しい話になってきたので、海斗は重々しい表情を作ってシエリスに調子を合わせた。「そうなんですか」

「とりあえず、もう一度ダンベルを持って、両腕をまっすぐ前に伸ばしたまま、十分間その姿勢を保ってみて」

海斗は言われたとおりにした。再び意識を集中させて、ダンベルを持ち上げた。ダンベルは簡単に持ち上がった。先ほどは数秒ほど持ち上げただけだったが、今度は十分間持ち上げ続けなければならぬ。海斗はダンベルを持ったまま、前ならえの姿勢をとった。

時間は一分、二分と過ぎていった。そして、時間の経過と共に、海斗はダンベルの重量がじわりと腕にかかってきているのを感じた。これが集中力の散漫による、イマジナリー・フォースの弱体かと海斗は思った。最初は発泡スチロールほどの重さにしか感じなかったダンベルも、いまやその重量が鉄へと近づいていった。

八分が経過した。ダンベルはずっしりとしてきたが、海斗の腕力の限界にはまだ遠かった。これは何とか十分間耐えれそうだと海斗は思った。

そのとき、シエリスが海斗の前に歩み出た。シエリスは海斗に向かってにこりと笑うと、いきなりブラウスのボタンを上から一つずつ外していった。

海斗は目を見開いた。シエリスはすでに第三ボタンまで外していた。ブラウスの隙間から覗く、たわわな果実に海斗は目を奪われた！ 海斗お気に入りウエブサイト『おっぱいバラダイス』でしかお目にかかれないような、圧倒的存在感を放つ乳。ほどよい張りがあつて、実に……。

が、次の瞬間、彼の両腕はダンベルの重みに引っ張られた。海斗

は前のめりになって、そのまま地面に叩きつけられた。

「ぐえ！」痛みで思わず声が漏れた。

シエリスはそんな海斗を見て、満足げにブラウスのボタンを閉じ始めた。

「だめじゃない。ちゃんと集中してなきゃあ」

海斗は画バット起き上がり、シエリス向かって叫んだ。

「いきなり何するんですか？」

「言っておくけど、わたしを脱ぎたがりの痴女だと思わないでよね。わたしは身体をはって、いかなる状況がやってこようと、海斗が集中力を切らさないかテストしてあげたのよ」

海斗は納得いかない様子で、シエリスを見た。

「いやいやいや、あれは反則でしょ！」

「戦場じゃあそんな言い訳通用しないわよ」

シエリスは小悪魔めいた笑みをうかべていた。

怒りの拳

修行を開始してから五日目の午前中での出来事だった。

ルナは修行中の海斗の様子を見るために、例の荒地に足を運んだ。海斗は相変わらずシエリスに付き添われてイマジナリー・フォースの開花を手伝ってもらっていた。しかし、彼は確実に成長を遂げていた。

シエリスは海斗に向かって、石ころを投げつけたが、海斗はバツタのようにぴよんといきよいよく飛び跳ねてこれをかわした。先ほどのジャンプは水平方向に四メートル、垂直方向に一メートルはあっただろう。明らかにイマジナリー・フォースを使っている。

ルナは舌を巻いた。自分がイマジナリー・フォースの訓練をしていたときは、わずか五日でここまで成長していただろうか。海斗の才能は本物だ。

シエリスはルナが来ていることに気づいた。「やあ、ルナ」「順調そうだね」ルナは二人のほうへ歩きながら言った。

「よお、ルナ。今さっきの見たか？」海斗は誇らしげだった。

「ああ、見てたよ。これだけの短期間であれだけの動きができるようになるなんて、正直驚いているよ」

海斗はフリスビーをきちんとキャッチして、主人のもとへ持つていった犬のように喜んだ。しかし、その喜びはルナの次の主張ですつと溶けてしまった。

「でも、二日後に行うわたしとの試合には勝てない。例えわたしが試合中ずつと逆立ちをしていたとしても、君が勝つ可能性は1%以下だよ」

海斗は激しく動揺した。「な、なんでさ」

「君が『ユニーク・イマジネーション』を身につけていないからだ」

ユニーク・イメージネーション。海斗には聞き覚えのある言葉だった。それをしつかりと思い出すのには、たいした苦勞はいらなかった。ルナが白銀の戦士を具現化する前に言った言葉だ。

「なんだよ。そのユニーク・イメージネーションって？」

「唯一無二、自分の頭の中にしかない想像を具現化するイメージナリィ・フォースだ。その想像は使用者によって大きく左右される。生き物であったり、物体であったり、肉体を変化させたり、それ以外にもいろいろある。ちなみに、わたしのユニーク・イメージネーションは『聖騎士（ホーリーナイト）』だ」

「ああ、おれを助けるために使ってくれたやつだな」

ルナはうなずいた。

「そして、ユニーク・イメージネーションはイメージネータの切り札だと思ってくれていい。己の力が及ぶ範囲では最強の技だ。これが使えるやつと使えないやつでは、その実力に天と地ほどの差があるといっても過言ではない」

これを聞いた海斗は、後頭部をハンマーで叩かれたような衝撃に襲われた。

シエリスが確認した。「ルナは明後日の勝負のときに、ユニーク・イメージネーションを使うつもりなの？」

「団長からは全力でやれといわれているんでな。必然的にそうなるだろう」ルナは淡々と述べた。「まあ、海斗がわたしの手を煩わせるほどの実力を身につけていければの話だが」

海斗はたまらず言った。

「だ、だったらおれも明後日までに、そのユニーク・イメージネーションとやらを身につけてやるぜ」

ルナは冷ややかだった。

「あまり物事を楽観視しないことだな。でないといずれ痛い目を見る」

そういつとルナはすたすたとアジトに向かって歩き出した。

「くそー、言いたい放題言っつて、今に見てるよ」

「うーん、でも今からユニーク・イマジネーションを習得するには無理があるかな」

シエリスの心もとない言葉に海斗はさらに揺らいだ。

「そ、そんな。やる前から不安にさせるようなこと言わないでくださいよ」

「でも、海斗君が今できるのは肉体強化だけでしょ。さすがに具現化もできない状態から、いきなりユニーク・イマジネーションはできないよ」

「このままじゃあ、ルナに勝てない」海斗はうなった。

「わかったわ。とりあえずやれるところまでやりましょうか。今日の午後の訓練から具現化に入るわ。それまで休憩にしましょう」

海斗も疲労していたので、この指示に従った。

昼の訓練開始までたっぴり二時間半あった。海斗は時間を潰すために、町の中をぶらぶら歩くことにした。

海斗はクオートに来て以来ずっと思っていた。この町は、人はそれなりに多いが、活気は感じられなかった。

人も多いし、店も多い。レストランや酒場は町のあちこちにあり、うまい飯が提供されていたし、町の広場には露天がいくつもあり、野菜や穀物、食べ物以外ではアクセサリーなどが売られていた。

商業は盛んだが、活気がない。なぜならここにいる人たちの顔に生気が宿っていないからだ。

海斗は一度、ルナに訊ねたことがあった。

「どうして、この人たちはこんなに暗い顔をしているんだ？」

ルナはこう答えた。

「言っただろう。ゼポネアではノーマロイドは厳しい生活を強いられるんだ。いくら商売がうまくいっても税金でこっさり持っていかれる。儲ければ儲けるほど、税金も高くなるんだ」

「そんな生活をさせられてよく暴動が起きないな」

「憲兵隊が配置されているんだ。この都市に限らず、ゼポネアにある都市すべてにな。構成員は当然イメージネータだ。例えクオートの全民衆八千二百人が反乱を起こしても、ここの憲兵三百五十人を打ち負かすことはできないだろうね。」

ちなみに言っておくが、この都市の憲兵隊は国内で一番の職務怠慢と言ってもいい。わたしたちの本部がこの都市にあるのも、そういう理由があるからだ。だけどな。それでも、ここのノーマロイドたちに勝ち目はないんだ」

実に残酷な事実だった。海斗はそれを聞いて身震いしたものだ。

海斗はルナに連れられて、一度来たことがあるレストランに入っていた。そのレストランは奥にカウンターがあるだけで、あとはだだっ広いフロアに丸テーブルと椅子が適当に置かれた、間取りもへったくれもない店だ。しかし、客足と比例するように、出される料理はすばらしく、海とのカップラーメン舌に衝撃的といえるほどの感動を与えた。

この日もレストランは繁盛していた。空いているテーブルは一つもなかった。海斗は鉱山夫らしき男たちと相席させてもらい。合鴨のグリルを注文した。

客たちは自分の連れと、はたまた、見知らぬ相手と思いい話をしていた。しかし、その雑談は、一瞬にして沈静化した。

ドアが開き、緑の軍服を纏った男が五人入ってきた。憲兵だ。

その姿を認めるや否や、客たちの雑談はぴたりと止んだ。それから客たちは、視線を自分の料理（すっかり食べ終えたものは皿）に

落とし、全神経を目の前のものに集中させた。

「おんや〜」サル顔をした憲兵がわざとらしく言った。「急に静かになりやがった。どうしたんだあ？　しゃべってもいいんだぜえ〜。それともおれたちにきかれちゃまずい話でもしてたのかなあ？　げはははは！」

サル顔憲兵は下品な笑い声を立てた。

それから、ひげを生やした男と後頭部が薄くなっている男が陣取っているテーブルまで歩いた。

それに気づいた二人の男は、おびえた顔で憲兵を見ると、自分の料理を引つつかんでそくさと他のテーブルに移った。

「おんや〜、悪いねえ。席を譲ってもらって。げはははは！」

憲兵たちは強奪したテーブルに新たに陣取った。海斗はこの光景を見ていたが胸糞悪くなった。

相席の男が、海斗の肩をぽんぽんと叩いた。

海斗は自分の肩を叩いた男の方を向いた。するとその男は蚊がなくような声、少なくとも憲兵たちには決して聞き取れない声で言った。

「じろじろ見るな、目線があつと因縁をつけられて、ひどい目にあつぞ」

憲兵たちは給料の話や、気に入らない上司の話をしていた。

そこへ二十代くらいのウエイトレスが、憲兵たちに水を運んできた。

そのときだった。緊張のせいなのか、ウエイトレスは空いている椅子につまずいた。その拍子に盆の上からコップが一つ飛び出した。それはサル顔憲兵の右腿に落ち、水浸しにしてしまった。

サル顔憲兵の顔から下品な笑顔が消え、赤みが差した。そして、立ち上がり、ウエイトレスを殴りつけた。ウエイトレスは床に倒れ、

いくつかのコップは床に落ちた衝撃で割れた。

「このアマ、おれに水をかけやがった！」サル顔憲兵は大声で怒鳴った。

憲兵を除いた一同は、ぎよっとしてその光景に釘付けになった。

ウエイトレスは、殴られたことなど露ほど気にせず、両手をつき、頭をたらし謝罪した。

「申し訳ありません！ 申し訳ありません！」

サル顔憲兵は怒りで息が荒くなっていたが、地面に這いつくばるウエイトレスを見て、口元を歪めた。彼は近くのテーブルからまだ中身のある酒瓶を奪い取り、その中身をウエイトレスの頭にどぼどぼとそそいだ。

酒に濡れるウエイトレスを見ながら、サル顔憲兵は愉快そうに言った。

「そつびくびくするな。おれはもうぜんぜん怒ってないんだぜえ。

げはははは！」

海斗は限界を迎えた。彼の中の義憤の炎は激しく燃え上がり、海斗を正しき道へと突き動かした。彼は椅子を倒さんばかりの勢いで立ち上がると、猛スピードでゲス野郎に向かって駆け出した。そして、その勢いを保ったまま、拳をゲスの顔に打ちつけた。

あまりにもいきなりのことで、残りの憲兵たちは海斗の介入を防ぐことができなかつた。殴られた憲兵は豪快に吹き飛び、食事が乗っているテーブルを破壊して、仰向けで無様に倒れた。

そのサル顔は踏みつけられた犬のウンチのようになっていた。

海斗は目の前の残骸を見て吐き捨てた。

「へっ！ 少しはハンサムになつたじゃないか！」

一対四の戦い

この出来事はこの場にいた誰にとつても衝撃的で、あまりにセンセーショナルな要素を含んでいたため、店の中はほんの数秒間、時間が止まったかのように静かになった。

残りの憲兵たちがぞろぞろと立ち上がった。

「おい、貴様」坊主頭の憲兵が海斗に詰め寄った。「自分が何をしたのかわかっているのか？ いや、そもそも自分の立場をわかっているのか？……下等なノーマロイドが！」

こいつらは勘違いしていると海斗は思った。自分をノーマロイド、つまり格下だと思ってくれることは大いに結構だった。相手が油断すればするほどこちらに勝機がある。

海斗は精神を集中させ、肉体強化を行った。

坊主頭の憲兵が殴りかかってきたが、海斗はこれを軽々とかわし、代わりに相手の顎に拳を見舞ってやった。海斗のパンチ力は石を割るくらいの勢いはあったため、相手はあっけなく床に崩れ落ちた。

海斗は、次にかかってきた憲兵の腹を殴り、後ろの方へ投げ飛ばした。その憲兵は豪快な音を立てて床に落ち、うめき声をもらした。これで残り二人になった。海斗はあつという間に半分以上を片付けた。

しかし、これで警戒した残りの憲兵たちは空中から棍棒を取り出した。とうとうイマジナリー・フォースを使い、本気で相手にすることにしたのだ。

武器を手にした相手を見て、海斗は慎重になった。下手をすると骨を折られるかもしれない。そのため、彼はファイティングポ

ーズをとつたままその場にじつとしていた。

対する憲兵は戦略というものがわかっていた。二人の憲兵は武器を構えたまま移動して、海斗の右斜め前と、左斜め前についた。

海斗はまずいと思った。この位置関係だと片方の憲兵に殴りかかろうとすると、もう片方の憲兵に隙をつかれることになる。

横っ飛びで憲兵たちをかく乱しようにも、人やものが溢れる店内ではそんなことはできそうになかった。

次の手を思案しているときに、海斗は他の客から恐怖の視線を送られていることに気がついた。どういうことだろうと思う暇はなかった。

次の瞬間、海斗の頭に砕けんばかりの衝撃が走った。海斗は椅子で後頭部を殴打されたのだ。

先ほど腹を殴られた憲兵の仕業だった。どうやら海斗は彼を完全にノックアウトしきれていなかったようだ。

海斗はその場にうつぶせに倒れ、次に憲兵たちの足が彼の身体に降り注いだ。

海斗はイマジナリー・フォースによる肉体強化でこの窮地を脱出しようとした。しかし、海斗は、もはや集中できる状態ではなかった。

彼は痛みと恐怖でパニックに陥っていた。そのまま海斗は暗い世界へと引きずりこまれていった。

抵抗しなくなった海斗を見て、憲兵たちはようやく攻撃をやめた。

「死んだか？」

「いや、まだ生きていますよ」

「じゃあ、牢屋に連れて行け」

海斗は二人の憲兵に両手を持たれ、足を引きずられながら店から連れ出された。

残された人々は不安を色濃く含む声でざわめきあった。

この一連の出来事をすべて見ていた男がいた。その男は店のカウンターで昼飯を食べていたのだが、ただの客ではなかった。彼は希望の船団の一員で、最近やってきた海斗のことをしっかりと覚えていた。

男はまずいことになったと思い、勘定を払うと、いまだ混沌の色が残る店からさっさと退散した。それから男はまっすぐにアジトに向かい上の人間に報告しようとした。

彼はルナとシェリスが話し合いをしている姿を見ると、二人の下へ駆け寄り、海斗が憲兵に連れ去られたことを伝えた。

「なんだと！」

ルナは驚いた。話を伝えた男は、これほど感情を表に出しているルナを初めて見た。

「何があっただんだ？」ルナは早口で訊ねた。

男は理由だけを伝えた。「憲兵を殴った。それも三人」
ルナとシェリスは言葉がでなかった。

男はそれから、海斗が憲兵を殴るまでの経緯を丁寧に伝えた。話をすべて聞き終わって、ルナが口を開いた。

「団長にこのことを報告しなければ」

緊急会議がロングの部屋で開かれた。海斗が憲兵に連れ去られたことは深刻なことだった。彼は一週間以内に公開処刑される。この国で憲兵にたてつくとはそういうことなのだ。

「ふん、あのアホが」ロングは苦々しい口調だった。

「どうしますか？」とシェリス。

ロングは腕を組み、じっと天井を見つめた。そして、しばらくし

てから口を開いた。

「助けにいくわけにはいかな。ここでおれたちが動いて、あいつを助けたとしても、その後、この町では憲兵の建物を襲撃した犯人を捜すため、大々的な捜索が行われるだろうよ。そうなれば、この基地の存在をやつらに知られる危険がある。あいつ一人のために、おれたち全員が危険に晒されるわけには行かない」

重苦しい雰囲気が漂った。そんな中でルナがロングと対立する意見と言った。

「しかし、だからと言って黙って見捨てるわけにはいきません」

「見捨てる！」ロングはすぐさま言った。

「いやです」

「ルナ、いいか。あの坊主が今捕まっているのは、坊主が選んだ結果だ。あいつは自分でこちらの世界に来ることを選んだ。おれの忠告を無視して、一週間の猶予を得た。そして、今日憲兵を殴り倒して返り討ちにされた。どれもこれも坊主の意思で起こしたことだ。あいつに責任がある」

「だからと言って、こちらに連れてきたわたしに責任がないわけではありません。わたしが彼の申し出を断っていれば、彼はつかまることもなかったのです」

ロングはいらだたしげに手を振り、もういいという身振りをした。「議論のすり替えをするな。今は誰が悪いかという話じゃなくて、坊主を助げるか助けられないかの話をしているんだ」

その後、三人の間でぎすぎすした議論が続いたが、結局、中立の立場をとっていたシエリスがロング側についたため、二対一でこの話に決着がついた。

部屋から出るとき、ルナはきつく奥歯をかみ締めて、自分の中に渦巻く感情に耐えた。

思考時間

海斗は暗い石造りの独房に閉じ込められていた。彼がいる空間は四×四×四メートルの立方体の形をした部屋で、通路の面には鉄格子がはめ込まれており、残りの三面は石の壁で覆われていた。格子の向こう側には看守が行き来する通路があるだけで、向かい側の独房というものは存在しなかった。

独房の環境は鶏小屋以下だった。部屋にはすっぱい臭いのする毛布が置かれている。これを寝床というならば、寝床なのだろう。当然、毛布一枚では、石の床の固さをごまかしかれるはずもなく、心地は最悪だ。部屋の隅には、木製の煙突みたいな物体が床から突き出ていた。これはいわゆる便所で、ここにけつを突っ込んで用をたすようになっていた。ただし、仕切りというものがなかったため、その姿は通路からまる見えだ。（興奮してしまう！）さらに、この独房に窓はなく、電灯もないため、頼りになる明かりは通路側の小さな窓から差し込む光だけだった。

そんな鶏小屋未満の部屋で、海斗は横たわっていた。さきほどの傷がまだ痛んだ。だが、幸いなことに骨は一つも折れていないようだった。

海斗ははらわたが煮えくり返る思いをしていた。ウェイトレスを助けようとして飛び出したはいいものの、返り討ちにあうとは！自分のふがいなさに腹が立った。

海斗は立ち上がり、鉄格子の扉の前に行った。それから通路に人の気配がないことを確かめると、イマジナリー・フォースで腕力強化を行い、鉄格子を握り締めた。そしてそのまま、鉄格子を前に押しやった。

鉄格子はみしみしという音を立てて軋んだ。もう少し力を加える

と扉は外れるだろう。

海斗はそこで手を離れた。今脱走する気はなかった。ここの警備の具合がどうなっているのかは知らないが、少なくとも五人以上は確実にいるだろう。さっきは五人相手に負けた。今度は少なくとも数十人は相手にしなくてはならない。

今ここで牢屋をぶちやぶったところで、その後、失敗することは目に見えている。今は行動するときではないと、海斗は考えた。

その代わり、海斗はイマジナリー・フォースに磨きをかけることにした。頭の中にもろくそくの火を思い浮かべて、精神統一を行った。どんなときでも、この精神状態を保てるようにするのだ。

どのくらいの時間が経っただろうか。足音が聞こえてきた。その足音はだんだんと大きくなり、海斗の独房の前で止まった。

海斗は通路側に目を向けた。そこには看守らしき男がトレーを持って立っていた。

「飯の時間だ」

男はそういうと、扉の下のほうについている小さな開口部からトレーを滑り込ませた。

「ちよつと」海斗は看守を呼び止めた。

「あん？」

「おれはこれからどうなるんだ？」

この海斗の質問に看守は、「何を言ってるんだこの馬鹿は」という顔をした。

「三日後に公開処刑だ」

海斗は心臓が止まりそうになった。

「公開処刑？ おれは死ぬのか？」

「何を寝ぼけたことを。憲兵を殴った当然の処置だ」看守はそう言うとうと海斗の独房の前から姿を消した。

海斗はショックを受けた。こんな理不尽があつてたまるか。ここから脱出することが海斗の最優先事項となつた。

海斗はその場に座り込み、思案にふけつた。まず、どうやってここから脱出するか、だ。檻は、イマジナリー・フォースを使えば簡単に破ることができる。問題はその後だ。どうやって、敵に見つからずにここから出られるのだ？ 海斗が使えるイマジナリー・フォースはまだ肉体強化だけだつた。

海斗はしばらく頭を悩ませていたが、ふとあることに気がついた。イマジナリー・フォースを使えば、少なくとも牢屋から抜け出すことはできる。つまり、目の前の鉄格子などあつてないようなものだ。だというのに、連中はなぜ自分をこんなところに閉じ込めているんだ？

海斗の頭にひらめきが走り、この疑問に対する答えが浮かんだ。

あの憲兵たちは海斗のことをイマジネータだと気づかなかつたのだ。あの乱闘のときに、海斗はイメージの具現化を使わなかつたし、多少の肉体強化を使つてはいたものの、ただの格闘だけで憲兵たちとやりあつた。だから、憲兵たちは海斗のことをノーマロイドだと思ひ込み、ノーマロイド用の牢屋にぶち込んだのではないか。

よく考えるほど、この推測は正しい気がしてきた。イマジネータを入れておく牢屋はもつと特別なものなのだろう。でないと、脱走し放題だ。

海斗はこれをチャンスと考えた。連中が自分のことを非力なノーマロイドだと思つている間は、奴らも油断するはずだ。どこかに逃げるチャンスが生じる。

そういえば、さっきの看守は公開処刑と言つていた。だとすると、刑の日には外に連れて行かれて、多くの民衆の前に引きずり出され

るのだらう。そのときが一番のチャンスかもしれない。

素直に従う振りをして外まで行き、民衆の前に出る。それから、刑が執行される前にイマジナリー・フォースを使って連中の掌中から逃れよう。相手も当然イマジネーターなので、すぐに追ってくるだろうが、人ごみの中に飛び込んで逃げ回れば追っ手を巻ける可能性は高い。

行き当たりばったり感はあるが、この場で檻をぶち破るよりは、逃げ延びられる可能性は数倍確実だらう。

海斗はこの作戦を気に入った。それから、腹が減っては戦ができぬということで、海斗は看守が置いていった飯に手を出した。

メニューはがちがちのパンに、コンソメスープらしきものだった。パンはまだ我慢して食べることができた。しかし、スープはというと……これが馬のシヨンベンだといわれても疑うことはないな！

次の日のことだ。ルナは憲兵署の前にある掲示板を見ていた。

全国に人相書きが出回っているの、本来ならば、こんなところにいるだけで危険なことなのだが、ルナは口元をマフラーで隠しているだけだった。ルナは、変装など必要ないと思っていた。どうせこの憲兵連中は人相書きなどまともに見てはいまい。例え見えたとしても、他人の空似で済ませるだらう。

ルナは掲示板に張られている告知を見ていた。それは処刑執行の告知だった。

その告知には、二日後の昼に、中央広場にて憲兵に暴行を働いた罪人の処刑を行う、と書かれていた。

ルナは時間と場所だけを覚えると、さっさとその場から立ち去った。

昨日、ロングに自分の意志と、船団に迷惑のかからない救出方法

を述べた。ロングはルナの話を黙って聞いた。

話を聞き終わったロングはルナに言った。

「そこまで言うなら、勝手にしろ。ただし、全責任はお前が負え。おれたちは一切助けない」

ルナにとっては十分すぎる解答だった。

処刑の時間に海斗を助けてみせる。ルナはそう決意していた。

迫りくる時

ユースタス・ロウは昼でも薄暗い裏路地を一人で歩いていた。

彼は今、マグナンという都市にいた。この街は、ゼポネア理想国とソルバド公国の国境の近くに存在し、同様に二国の国境付近にある都市の中では、最も大きい都市であった。

ユースタスはある小屋の前で立ち止まり、そのおんぼろの扉をノックした。

「どうぞ」中からしゃがれた声が聞こえてきた。

ユースタスは小屋の中へと入っていった。

その小屋の中は無駄なものが一切なかった。木製の床の上にあるのは、テーブル一つ、と椅子が二脚、収納棚が一つだけだった。

テーブルの向こう側には、髪の毛をほさばさに伸ばした男が座っていた。

男はユースタスをちらりと見て言った。「おやおや、旦那でしたか」

「頼んでいた情報は手に入れられた？」

「へっへっへ、もちろんちゃんとこの耳におさめていますよ。旦那」

「確かな情報なんだろうな」

「そいつは心外ですね。このわしが一度でも不確かな情報を提供したことがありますか？」

なかった。この情報屋には何度か仕事を依頼していたが、彼は毎回、恐ろしいほど正確な情報を手に入れてくるのだ。

「悪かった。ただ今回はどうしても間違いがあつてはならなくてね。それでいつなんだ？」

「へっへっへ、ゼポネアは五日後に開戦宣言をしますよ」

このことを聞かされても、ユースタスは目立ったりアクションをとらなかつた。

「五日後か」

「ただし、一日、二日の遅れはあるかもしれませんが。何かのトラブルが起きないとは限りませんからね。それよりも、驚かないんですね」

「いつ始まってもおかしくない状況だからな」

戦争が始まればこのマグナンは重要な戦略上の拠点になるだろう。その証拠に、毎日のように首都から兵士たちが送られてきた。おかげで、今では街のあちこちに兵隊の姿があるのが、すっかり日常化してしまった。これこそ戦争が近いという証拠だ。

「しかし、毎度毎度あなたの情報収集能力には驚かされるよ。どうやっているのか不思議だよ」

「へっ！ そいつは誰にも教えられませんか」

ユースタスは報酬として八千レコン（四十万円）を支払った。

これで前金として渡した四千レコンと合わせて、男には一万二千レコン（六十万円）支払ったことになる。やれやれ、情報とは高いものだ。

ユースタスは小屋から去ると、もときた道を引き返して、街のメインロードに出た。彼はたくさんの通行人の間を縫うように歩いた。

次に彼が訪れた場所は、寂れたアパートだった。

そこは外壁が石で造られた三階建てのアパートだった。石の無骨さを少しでも和らげるために、その外側は白ペンキをぺたぺたと塗られていた。

ユースタスはアパートの二階に上り、五号室のドアを二回、一回、四回と変則的にノックした。最後のノックが終わるとすぐに掛け金が外れる音がして扉が開いた。そこには、輝くような金髪を腰まで伸ばした女性が現れた。顔の特徴を述べると、彼女は、ほっそりとした顔つきで、厚い唇に、情熱を秘めた目をしている。

彼女は無言でユースタスを迎え入れた。ユースタスが中に入ると、再び掛け金が閉められた。

ユースタスと金髪の女性は、奥の部屋に行き、床に座り込んだ。というのも、その部屋には家具の類が一切なかったからだ。

「五日後に始まる」ユースタスは簡潔に述べた。

「意外、というわけでもないかな。街の様子でその日が近いということのはわかるわ」

ユースタスはうなずいた。

「早急に行動しないといけないな」

女性のほうも同意した。

「ああ、ロングにこのことを伝える必要があるわ」

「ゼポネアの動きはわかった。あとはソルバドはどう動くかだな」

「その通りね。ソルバドが徹底抗戦に打って出るなら、わたしたちもソルバドと同盟関係が気づけるかもしれない。そうなれば、ソルバドと連携して、外と中からゼポネアを叩けるわ」

「どちらにしても戦争が始まれば、一度ソルバドを訪れる必要があるかもしれないな」

二人は揃ってアパートから出て行った。これから三日かけてクオートの本部に戻り、ロングたちと会わなければならない。二人は『ヘテカ』行きの馬車に乗り込み、マグナンを後にした。

奇しくも、その同じ時間には、クオートにて海斗の処刑が行われようとしていた。

海斗は手かせをつけられた状態で牢屋から出された。これは彼が想像していたよりもゆるい拘束だった。海斗は手かせだけでなく、足かせもつけられるものと思っていた。海斗は、これで脱出はうんと楽になったと思った。

海斗は両脇を二人の憲兵に抱えられるようにして、中央広場まで

連れてこられた。

中央広場はクォートの中心に存在していた。そこは円形の広場で、真ん中には噴水、広場の北側には時計台が設けられている。円の縁をなぞるようにささやかな植林が施され、風景に温かみを加えていた。この広場に通じる道は三箇所、東、南、西から一本ずつ広い道が出ていた。

処刑台は噴水と時計台の中間に設置されていた。その処刑台はそれほど高くなかった。背は小学校の全校集会で先生が上るお立ち台程度の高さしかない。階段をたった三段上れば、死と絶望の舞台へとたどりつく。

海斗は処刑台の階段の前に来ていた。彼はそこで、絶望に打ちひしがれた青年を装って、隣の憲兵に訊ねた。

「おれの処刑は何時になるんだ？」

憲兵はあざけるような口調で言った。

「後ろの時計で一時ちょうどだ。つまり、お前の寿命はあと十八分だ」

無論、海斗は自分の寿命をあと十八分にするつもりはなかった。

海斗は周りの様子を見渡した。処刑台の周りには憲兵が九人いる。

処刑台の上には一人、そして、自分の両脇には二人だ。全部で十二人だ。

処刑台の上にいる憲兵は大きな斧を持っていた。どうやらこの国では、死刑囚は斬首にされるらしい。

海斗は憲兵の持つ斧を見ても怯まなかった。ここで精神を乱してはイマジナリー・フォースがうまく使えない。なんとか平常心を保つのだ。

処刑を見物しに来ている民衆の数は、海斗が予想していた数よりも、ずっと少なかった。全員で五十人程度だろうか。広場の大きさ

も手伝って、人ごみに紛れて逃げられる状態ではなかった。

しかし、やるしかないのだ。海斗は気を引き締めて、処刑台の一段目に足をかけた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1366x/>

世界を穿つ想像の力

2011年11月3日03時11分発行